

# 同志社と25年

## —永年勤務者の感想—

### 同志社精神

滝本 二一郎

同志社は既に創立九十五周年を祝い、やがて百周年を迎えようとしている。もうそろそろ同志社ファミリーの三代目か四代目の学生が現われるのではなかろうか。外国では百年以上の歴史をもつ大学は珍しくないが、日本では、同志社ほどに古い伝統をもった大学は数少ないのである。同志社に学んだ者は、この古い伝統を大いに自負してよいのみならず、大切にしよう心がけねばならない。

さて、同志社の古い伝統とは一体何であるうか。それは創立者の立学の精神、すなわち、キリスト教主義による教育方針と、外国語教育を重んじる精神であると思う。前者は、良心的な人物の養成を、後者は、国際的

な広い視野をもった人物の育成を目指しているのであると私は理解している。これこそ同志社の誇るべき伝統であり、いわゆる同志社精神であるといって差し支えないであろう。

私は昭和のはじめ同志社に学び、終戦の年に母校へ帰ってきた。今年で恰度二十五回目の卒業生を送り出すことになるが、私の学生時代を偲ぶと全く隔世の感が深い。当時の建物で昔ながらの姿を残しているのは、有終館、クラーク館、理化学館、チャペル、図書館くらいのものである。今は鳴らないが、あの頃、彰栄館の時計台から聞こえてきたチャイムの音は、いまだに印象的である。また雨漏りのするバラック教室があった。講義のさ中に、学生がよく教科書やノートを抱えながら、座席を移動したことも思い出される。今の学生には全く想像も及ばないことであろう。学生数にしても、今とは比較にならぬほど少なく、文学部の場合、多くて十五名前後といったクラスばかりであった。従って、先生方に顔や名前をすぐ覚えられて、欠席したり遅刻したりすると気が引けたものだ。だが、それだけに、先生と学生との間に深い親しみがあったように思う。

先日、私の同期生が久しぶりに訪ねてきた。彼は、堂々たるビルがところせまいまでに建ちならんでいるキャンパスを歩きながら、「今の学生は恵まれ過ぎていて」といった。そして、さすがに建物は立派になったが、マスプロ教育のために伝統的な同志社精神が損なわれているのではないかとという危惧の念をもちた。しかし私は、最近の卒業生から、「同志社を卒業してよかったと思えます」とか、「東京へきて同志社のよさを知りました」とか、「同志社学園の雰囲気が無性になつかしいです」などと書かれた手紙を時折りもらって、同志社精神はまだまだ亡ろびていないと信じている。

終戦後早いもので、既に四半紀過ぎ去った。その間大巾な学制の改革をみた。近くはまた学園紛争などを契機に、カリキュラムなどの変更が着々と進められている。しかし今後どのように学制が改革されようとも、同志社精神だけはいつまでもゆるぐことなく、守り続けられることをひたすら祈っているのである。

(文学部教授・英国小説)

## 同志社勤続

### 二十五年に思う

網島 貞男

化転の中をさまようこと既に五十年、古歌によればもう人生の終焉にきたはずであるが、まだ元気でいるところからすればまだあと何年かは生きて行けそうである。その五十年のわが人生の半分、二十五年を同志社ですごしたと人から教えられた。二十五年といえば永い年月であるがふりかえってみると総ては夢幻のようである。

昭和十九年に京大を出て川崎航空に就職したが、間もなく兵隊にとられて技術将校としてまた川崎航空に帰ってきて陸軍の出先機関として会社側を苦しめたため、終戦になって軍籍を離れると会社はいち早く我々をくびにしてしまった。止むなく京都へ帰ってきた私

は母校から同志社に行かないかと話をもちかけられた。先生という職業はあまり私には向いていないと思いつつ、他に行くところのないまま、ほんの腰掛けのつもりで同志社にきたのが終戦年、昭和二十年十月で川崎をくびになってから一カ月後であった。採用手続きは今のよう複雑ではなく唯指定された日に校長(工専校長)に会うと、既に母校よりくわしい連絡があったとみえて五分間ほど面談した後「助教でやとうから明日から来て下さい。」とあっけなく終った。

採用にあたって校長は「先生は聖職であるから聖職にあまんじなければならぬ。」といったが私は「こんちくしょう。人を安く使おうと思つて聖職などおだてよつた。」と心の中で反発したのを今もつて憶えている。一カ月後にもらつた給料が九十円で終戦までもらつていた軍隊の給料が百八十円であったので丁度半分に減つたわけである。四、五カ月後になってキャベツ一ケ、大根一ケが五、六円になるに及んで校長のいつた「聖職」をぞんぶんに味わうことになった。

それから四年ほどの間、昭和二十四年頃までは食ふこと、生きながらえることに精力

をつくした。丁度その頃現在の妻と結婚した。結婚後四、五年の間は生活は苦しかったがたのしかったので夢のように過ぎ去った。昭和二十七、八年頃になって、腰掛けと思つていた先生稼業もそろそろ板についてきて、もうこれは私の一生の職業になりそうだと気がついた時、一つ、学位でもとらなくてはと思うようになった。それから数年の間学位をとることに私の全精力をそそぐことになった。昭和三十三年にやっと京大から学位を戴くことになった。(これは私の努力もさることながら星名泰、西原利夫、また既に死去された吉本源之助諸先生及び京大の先生方に負うところ大なることをここで改めて申上げておきたい。)学位がとれたので、こんどは一丁、自力で外国留学してやろうと考え、米国の学者と交信するとともに会話の勉強をし、自分の論文を米国の大学に売り込むことに専念した。学位をとってから三年目に米国立フロリダ大学にもぐり込むことになった。フロリダ大学で博士号をとる青年と下宿をともにし、アメリカ人の風習を知るとともに米語にかなりの自身をつけることに成功した。フロリダの一年はたのしい思い出の多い一年であった。

何十年の間つねにある目的をかかけて馬車

馬の如く、まっしぐらに人生街道を突進して一つ一つ標的を射止めて行つた。一わたり標的が射止められた時「あーやれやれ次は何をしようか」と小休止に入つた。ある夜、夜中えるともなくほんやりしている間、もうあと自分は何年生きられるだろうか、いつかは死なねばならぬ、その時はどうすればよいか、次から次から「死」に対する疑問がわいてきた。死の恐怖におどろかされた。こんなことは今までかつてなかった。時にはそれを口にしたこともあったが、これほど「死」の問題が深刻に私の上におおいかぶさつてきたこと

## 二つの思い出

久次米 哲子

昨秋創立九十五周年に際して、永年勤続者の一人として同志社から表彰して頂いた事

はなかった。十年前頃までは想像もしてみなかった事であった。「あー、年をとつたものだ。」と気がついた。数日後「あなたは同志社で二十五年勤続された。」と知らされた。「勤続二十五年の感想は」と聞かれた時、私は即座にこう答えるだろう。「同志社は私にとつて特に居心地のよい所でもない、といつてまた特に悪い所でもない。二十五年の私の生活は平々凡々そのものであった。私はここでモーパッサンが今わのきわに枕元で弟子から「あなたの人生はどうでした」と聞かれた時答えた名句を思い出す。

*Ne si bien, ne si malvais.*  
(工学部教授・機械設計法)

は、私の一生にとつて最も大きい出来事の一つである。然しこの長い間私は一体何をなし得たであろうか。私は唯家政科とともに歩んだ長い年月を今しみじみと想起している。

第一の思い出は終戦直後非常な物資不足に悩み、家政科は保健、育児を中心にしていたが、その理想とする家庭生活も社会生活も全く手の届かない所にあつた。然しあらゆる面で切りつめたその日暮しの生活から、明日への閃光がみえてきたのはそれから程遠くはなかつた。昭和二十四年には高い理想を掲げた大学令による同志社女子大学が設立された。

単に學問の研究だけでなく徳性を養い教養ある人物を社会に送り出すために、学芸学部としてその発足をしたのである。従って一般教養学科の中でも聖書と人間関係がその中心であった。この学部の一専攻として家政学は誕生した。然し当時は大学としての家政学は、他の専門学のように基礎のある学問であろうかとの疑問が学識者の中に潜在していた。私共は科学を基礎とした生活に直結している立派な学問であると感じ、今までの家政の教科内容を再検討し、実習を実験に切りかえたりした。このため三人の先生方が他の大学や高等学校に去って行かれた事は、当時が一番苦しい悲しい思い出である。残った少数の教員は家政学の基礎を築くために真剣であった。この分野は食物、被服、住居、児童、家庭経営等と非常に広い上に一つの共通点があり、科学のみに偏りすぎるのでなく社会に関心をもち、たえず流動している中で連帯意識のもとに自らを生かし調和を求めて行こうとする事であった。

段々この内容も充実し、機械器具も漸く揃い始めた昭和三十八年一月には第二の大きい事件が起こった。それは家政科中心の建物で

あった家政館の火災である。一月三日早朝の二階西北の窓から吹き出す黒煙をみたと、すべての大切なものが天に向かつて巻き上げられるのではないかと思われた。翌日現場検証の立会人として焼棒を伝つて二階に上った時、冷たい氷雨の中で家政科はここから力強く立ち上がるのだと感じた。その後家政東館、家政新館の廻転がよく一応学生実験は継続する事が出来た。そして同志社全体の厚意と激励の下に早くもその翌年同じ場所に立派な実真館が建設され、失った実験実習室は勿論、化学は有機と無機に分かれ、繊維化学、

栄養学の実験室、被服実習室や演習室等が設けられた。第二期工事によって家政東館の実験室等がここに集中される日も近いのである。学生数の増加とともに制度も順次改善され、今日では家政学部として食物と家政の専攻をもつようになった。こうして大学は多くの力強い卒業生を家庭にまた社会に送り出しているのである。過去から未来へ延々とつながっている中で、これらはピンホールよりもっと小さい私の思い出である。

(女子大学教授・栄養化学)

## 二十五年前

— 就任の頃 —

野村 芳雄

帝都最後の大空襲の夜、私は新宿浄水場に逃げ、貯水池の水を浴びながらお互いに衣服

に降りかかる火の粉を消し合つて夜の明けるのを待ったが、続々と来襲するB29の大編隊の銀翼は火の海の炎を反映して真っ赤に輝き、その凄烈な美しさに呆然とした。我が家の焼跡の灰の中に、半年前借金までして購入したばかりのドイツ製のピアノが無惨な鉄骨とねじ曲つた鋼線の束となつて横たわっていた。四年間の作曲学の受講のノートも記念すべきアルバムも跡形もなく焼失し、呆然自失するばかりであった。四谷までトポトポと歩き勤務校を訪ねたがこれまた全焼。生徒達の積立預金を学校の金庫に納入するのを忘れ事

務机の中に入れたままであったことを思い出したが、鉄筋の校舎は総て伽藍堂でこげ臭く、猫の子一匹いない。

僅かばかりの退職金で焼失した生徒達の預金を全部弁償し、敗残の東京に見切りをつけ裸一貫、満員列車の網棚の上に寝て京都の母のもとへ帰ってきた私は翌日懐しい母校同志社中学を訪ねると校長の前窪勝之助先生が慈父のような温顔をほころばせ「よく帰って来られたナ。この学校も教員が次々と応召でひどく欠員で困っている。どうだ君はここで働く気はないか。」とおっしゃる。私は数日の猶予を頂き有難くお受けすることに決めた。

当時の学校は勤労働員で私は早速伊丹の三菱軍需工場へ派遣された。度々編隊爆撃に遭い生徒とともに防空壕に逃げ込むこともあった。生徒達の荒んだ気持を少しでも柔らげようと、中堀愛作・柳島彦作・加藤延雄の諸先生方とともに各寮を男声合唱をして廻った。当時生徒だった鷺淵部子さんもバイオリンの妙音で慰問して下さった。

八月十五日、工場前の広場に整列し終戦の詔勅放送を拝聴した時は「もうこれで生徒を無事に帰宅させることができる。」と思うと、

急に肩の荷が降りたような虚脱感を覚えた。

それからの学校は食糧増産のため、校庭は全部芋畑と化し教員も生徒も交替でせつせと収穫に励むことになった。教科書は到る処を墨で抹消し、皇国思想や軍事色は一掃されたが、教師は何をどのように教えてよいのか戸惑う期間がかなり続いた。

高女部は、軍部の圧力でその職にあった石塚多先生が部長を辞し末光信三先生が女子中高校長に復職され片桐哲先生がそれまで女専と高女部の校長を兼任していたのを女子大の専任となられた。私も末光先生の要請を受け同中を辞し女子中高に転じ今日に到った。その間末光信三・永島嘉三郎・堀数馬・仁井国雄の諸先生を校長と仰ぎ、温きご教示を受け、また同中では前窪・加藤延雄両校長のご指導を頂きまた多くの同僚諸先生の友情と交誼を賜り、浅学非才の私がかこまで導かれたことに対し衷心より感謝せざるおれない。

また、湯浅八郎・大塚節治・住谷悦治各総長秦理事長各先生方の人徳望手腕と教職員的一致協力と学生々徒の努力により同志社は創立百周年に向かって躍進の一路を続けてきたことは御同慶に堪えない。私も残る生涯を駄

馬に鞭打って同志社の為に努めたいと思う。  
(女子中高教諭)

## 同志社時報 (第40号)

<座談会> 同志社百周年を迎えるにあたっての展望

アンケートに答えて

明治晩年の頃の同志社生活

大塚 節治

アーモスト大学再訪

北垣 宗治

教皇パウロ六世との会見記

志村卯三郎

韓国の学生、同志社の先輩たち

中条 毅

随想・新刊紹介ほか

(一部 100円・年4回発行)

# 新島襄と理事功程 (一)

— 明治初期の教育制度史からの試論 —

駒 井 四 郎

最近、明治初期の教育制度史を読んでいる時に知ったことは、わが国の教育制度に重要な役割を果たした、理事功程を背景とする田中不二麿、木戸孝允と新島襄の関連について述べているものは皆無であるということであった。

新島襄を、わが国の教育制度史の観点から再評価することは、明治初期の教育制度史の変遷を説明する上においても、また同志社創立の歴史を理解するためにも必要ではないかと考える。この試論が今後の幅広い文献研究によって深められることを期待するものである。

## 一、特命全権大使と新島襄

### 欧米教育制度の視察

同志社創立九十五周年を記念して、昨年の十一月下旬に遺品庫において、「新島先生と日本の教育展」が開催された。その中に「理事功程」十五巻と先生直筆の理事功程草稿の一部が、理事功程の原文と対照して展示されていた。理事功程は、明治六年十一月、当時の文部大輔田中不二麿が理事官として、欧米の教育制度事情を調査した報告書であって、わが国の明治初期の教育制度と深いかかわり合いをもつものである。

新島襄と理事功程の関連については、「同志社設立の始末」に、

「明治の初年故岩倉特命全權大使の米國に航せられしや、文部理事官田中不二麿君之に隨行し、欧米諸國教育の実況を取調べらる。時に裏正にアンドウア邑に在て勤學せしが、亦召れて文部理事官隨行の命を蒙むる。裏敢て之を辭せず、直ちに旨を奉じて理事官と偕に先づ北米中著名の大中小学の學校を巡視し、終て更に歐洲に赴き、蘇格蘭、英倫、仏蘭西、瑞西、和蘭、丁抹、独逸、魯西亜等の諸國を経歴し、學校の組織教育の制度等を初めとして、凡そ事の學政に関する者は聊か之を觀察講究することを得、其周到善美を尽せるを觀て感益に切なり。」と述べられている。

岩倉特命全權大使の一行には、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、寺島宗則といった維新の元勳ともいべき人物が副使として隨行した。それは明治四年十月であったが、政府は當時國內に起つた不平等條約改正交渉と封建國家より近代國家への移行に伴う諸制度の改革が、焦眉の急を要した為に、欧米の文化、制度を調査する必要に迫られていたのであった。田中不二麿はその一行に文部大輔として、特に欧米の教育制度を調査する任務をもつて参加したのであった。

さて、條約改正交渉にまつわる出来事として、「明治以降教育發達史」には、「然るに明治四年條約改正の議が起こり岩倉大使の一行欧米に發向し、先づ米國に至り將に改正の談判を開かんとするに当たり、忽ち切支丹宗門云々の制札が公然國中に建てられていたということが問題となつて談判に不都合を來たしたので、大久保利通、伊藤博文の両副士が一旦該國から引返した際に、我國の法律（新律綱領の如き成文律を指す）中基督教を禁する正条

はないが猶ほ禁令が高札中に存して居るので、動もすれば外國が我國は信仰自由を許さざる未開國なりとの口実を設けて對等の權利を我に与ふるを拒み、改約の議に應ぜざる情勢なるが故に速に此禁を除くべしと論じた。そこで政府も遂に其説を納れ、明治六年二月二十四日太政官布告第六十八号を以て切支丹禁止の高札を撤廢するに至つた」と記しているが、われわれは後進國家代表としての大使一行の狼狽ぶりと苦惱を彷彿として想起することができるのである。そしてこの切支丹禁制の高札撤廢の背景には、すでに熱烈なキリスト教信仰をもつていた新島襄の説得や森有礼ワシントン駐在公使の進言があつたことは推論するに十分である。

さて、明治三年七月新島襄はアーモスト大学をB・C(Bachelor of Science 理学士)の學位を得て卒業したが、日本の同胞にキリスト教の福音を伝えたいという念願は、先生をしてアンドパー神學校に入学せしめたのであった。明治四年三月森公使(ワシントン日本帝國少弁務使)がボストンを訪れた時に、彼は新島襄と面會し、その識見と人物に感銘し、若し日本に帰國することを希望するなれば、國禁を犯した脱國の罪が許されるよう取りはからうことを約したのであった。森公使は岩倉大使一行の欧米訪問が先づ第一に米國であると知ると、新島襄に手紙で大使一行の到着までに米國の教育事情を調査しておくことと、大使一行が到着すれば首府ワシントンに来て、田中理事官に隨行し、通訳と調査を手伝うことを依頼したのであった。かくして明治五年三月十九日新島襄は大使一行と會い、田中理事官と四月一日から各地の視察の

ためワシントンを出発したのであった。<sup>⑥</sup>

### 明治五年の学制発布の高踏性

それより先わが国においては明治四年七月十八日文部省が新設され、大木喬任が初代の文部卿に就任した。その後わずか一年にして、すなわち、明治五年八月二十二日に、わが国の教育制度を近代化せんとする「学制」が頒布されたのであった。明治五年の学制は、確かにわが国の教育制度史において規模雄大な画期的なものであった。それは日本全国を八つの大学区に分ち、大学区には三十二の中学区、中学区には二一〇の小学区を置設するというもの（全国に八つの大学、二五六の中学、五三、七六〇の小学校）で、非常に徹底した学区制による中央集権的教育制度を目指していた。そのことは学制第一章において「全国ノ学政ハ之ヲ文部一省ニ統フ<sup>④</sup>」と定めていることにおいて明らかである。

学制の制定について、当時の政府や文部省において如何なる外国の制度を参考にし、如何なる論議がなされたかは、「教育制度発達史が指摘することく、正確な資料に乏しい為に明らかでない。しかし、全国を大学区、中学区、小学区に分ち、大学区に督学局において区内の諸学校を監督せしめ、文部省がその上にあつて全体を統轄するという制度は、当時のフランスの「アカデミー」(Académie)の学制を模倣したことは間違いないと考へる。フランスにおいては、フランス革命の反動として発生したいわゆる統領政府の台頭によって、その帰結ともいべき一八〇八年三月十七日のナポレオンの教育令による徹底した国家主義的公教育制

度を出現せしめたのである。ナポレオンの帝国大学制度は、全国の控訴裁判所管区と一致する十七の大学区 (Académies) を設け、大学区総長 (recteur de l'Académie) が国家の行政官として大学区内の凡ての学校すなわち大学、中学、小学を監督するというものであった。そして大学は総合大学というよりも、むしろ専門学校化され、国民の国家的公教育という立場から師範学校が充実され、中小学校においては画一的な教則が制定されたのであった。

そのことは学制が「小学ヲ分テ上下二等トス下等ハ六歳ヨリ九歳ニ止リ上等ハ十歳ヨリ十三歳ニ終リ上下合セテ在学八年トス」また「小学校ノ外師範学校アリ此校ニアリテハ小学ニ教ル所ノ教則及其教授ノ方法ヲ教授ス当今ニ在テ極メテ要急ナルモノトス」と定めていることはフランスの学制を模倣したものであることは、理事功程卷之四のフランス編をみれば明らかである。<sup>⑤</sup>

明治五年の学制は、前にも述べたごとく我国の学校教育制度を法的に確立し、大木文部卿が「万国学制ノ最善良ナルモノ」をとつたと高言した如く、日本の近代化政策を世界に示すことにおいて意義がある画期的なものであった。しかし、この学制が外国、主としてフランスの学制を、わが国の当時の社会的、経済的、具体的条件を無視して、翻訳的にしかも拙速に高踏的に導入したことに問題があった。そのことは学制が頒布の直後から各方面からの批判に曝されることになったことによって明らかである。

### 岩倉大使一行の学制批判



「理事功程」15巻と新島襄直筆の草稿の一部

学制が制定された時には、前述の如く岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文といった政府の実力者は特使として海外にあり、したがってわが国教育の基本を定める最初の教育法規が、留守内閣の独定によって成立したともいえるのである。岩倉具視が欧米視察から帰国した後の上奏文の中には「具視勅命ヲ奉シ、出テテ欧米各国ニ使シ、発西ノ歳帰朝復命ス。初メ臣等発遣ノ時ニ臨

ミ、政府諸臣ト約スルニ政務釐革ハ、欧米歴聘ノ後ヲ期ス可シト。然ルニ政府諸臣ハ在外ノ使臣ト其意見ニ差違ヲ生シ、前途ノ革政ニ急進シ、前事未タ行ハレサルニ後事ニ着手シ、政務多端ニシテ区域際涯無キカ如シ。官民共ニ其弊ニ堪ヘサラントス。是レ、臣等カ曾テ期セル所ナリ。臣具視帰朝ノ後、政府諸臣ト熟

議シ、輕躁急進ヲ戒慎シ、各国ノ所長ヲ参酌シ、漸次進歩ヲ図ラント欲ス<sup>①</sup>と述べている。この上奏文において岩倉は特に学制を名指してはいないが、留守内閣の輕卒な急進政策批判の中には、暗に明治五年の学制の件を含めていたことは間違いないであろう。そのことはまた大使一行が海外からの進達書によってなした学制批判によっても証明されるのである。

すなわち、欧米視察中に田中理事官とともに、新島襄と特に親交があった木戸參議は、学制が海外にあたえた反響を伝え、余りにも近代的に美装された学制が、むしろかえって外国から疑いの目でみられていることを述べて「西洋学者も却而全備に過候と種々狐疑いたし、様々之議論も不少候」としているのである。また大久保も「形容ハ頗ル文明各国ノ域ニ近シ。只、実跡如何ト想像スル而已」と批判している。さらに大使一行の中で学制に批判的であったのは、岩倉、木戸、大久保のみでなく、伊藤博文、寺島宗則らも欧米視察の体験から、フランスの学制を翻訳的に高踏的に模倣した学制の修正を政府に申入れているのである<sup>②</sup>。これらの明治五年の学制批判の背景には、欧米の教育制度を具に見聞した田中理事官と新島襄の意見が相当程度、影響したことは間違いない事実であろう。そしてその後の学制の修正と改革は、木戸と田中を中心として展開されるが、その基礎は欧米の教育制度を实地に調査した理事功程が重要な役割を果すことになったのである。(続)

(注)

①同志社、同志社設立の始末、同志社大学設立の旨意

(昭和三年三月版) 二頁

②教育史編纂会、明治以降教育制度發達史第一卷

(昭和三十九年十月版) 二頁

③加藤延雄著、新島襄先生略伝(昭和四十一年十一月版)

四六一四九頁

④文部省大学学術局監修、大学管理運営関係資料集

(昭和四十一年五月) 一頁

⑤東大出版会、日本の大学(日本の大学の歴史―明治以降)

(昭和四十四年十二月) 二三頁

文部省印行、理事功程

(明治十年六月再版)

一七六頁

〔第二大学区〕

全国ヲ十七区ニ分ケ其区ヲ大学区ト云フ一大学区中ニ数県ヲ包括ス

仏国ノ大学区ハ一千八百八八年三月十七日ノ

決議ニ依リテ定ムル者ニシテ初ハ其数上等級判所ノ数ト

等シカリシガ一千八百四十八年ニハ二十大学区ト為シ一千

八百五十四年減シテ十六大学区ト為シ其後一千八百六十年

ニ又増シテ十八大学区ト為シ当今ハアルゼリーヲ併セテ十

七大学区トナセリアルゼリーハ仏国ノ属地ニシテ亜仏利加

洲ニアル者

一七四頁

〔拿破侖第一一千八百六年五月十日一千八百八八年三月

十七日ニ及ヒ一千八百八十一年九月十五日凡三回ノ布告ヲ以

テ「ウニヴェルンテ・ド・フランス」ヲ起シ其長官ヲ大

統領ト云ヘリ今日ノ文部ハ少シク此制ヲ釐革スル者ナレ

モ文部ノ基礎ト為ル者ハ即是ナリ」「文部省ハ宗旨及ヒ印

書、音楽、絵画、劇場等ヲ兼管スル者ニシテ其省内ヲ三寮

ニ分ツ即左ノ如シ

第一小学寮

第二中学寮

第三大学寮

一七七頁

「巴勒府ノ大学区長官ハ文部郷之ヲ兼管セリ但シ事務多キ

ヲ以テ副長ヲ置ク之ヲ大学区副長官ト云フ」

一八〇頁

「第二小学校ノ生徒ハ男女ヲ區別ス人口四百以下ノ

区ニ於テハ願ニ因テ男女校ヲ許ス生徒ノ齡ハ六年ヨリ

十三ニ至ル」

⑥井上久雄著、近代日本教育法の成立

(昭和四十四年三月) 三、四頁

⑦同

四、五頁

# 明治晩年の頃の同志社生活 (二)

## 大塚節治



本誌四〇号所載の拙稿を御覧下さった方は誤植が多く読みずらかったことと察しおわびいたします。その内二つだけここに訂正させていただきます。一つは杉浦が殆んど皆松浦となっていました。松浦は誤りで杉浦が正しいのであります。いま一つは日本海々戦の祝勝会で宣教師オールチン氏が独唱した文句が、「本野大将風呼べば……」となっていました。が、「東郷大将風呼べば……」の誤りであります。ここに訂正しておきます。

一

さて大西留吉君は已述のように明治三十九年二月から同年九月まで休学して志摩の国を行商しながら養生して、九月に帰校就学したのである。彼は三年生の学年試験を受けてい

なかったから元の三年級に止まったと思う。

越えて明治四〇年の春までは彼について特記すべきことはなく、まず無事に三年生の課程を終えて四月には四年級に進んだはずである。但し無事であったとはいえ彼は健康を完全に回復したわけではなく少し元気を回復したに過ぎなかったのであった。彼は神田君が代行していた彰栄館の鐘つきをまた始めた。ここで作家の故浜本浩君が大西につき「鐘はなぜ鳴る」という小説を書いたときいていることにふれる。何時の頃、だれからきいたとも覚えませんが、きいたことは確かである。と

ころでその実否をいまだに確かめ得ないでいる。浜本君は明治四十一年以後一、三年間、私が六寮の寮長をしているころ寮生の一人であり、かなり親しくした友人である。後、彼

が作家として名をなしてからも東京の校友会などで度々会っていたが、この件を直接に確かめなかったことは今となっては自らの迂闊さを残念に思うのみである。

大西君は三十九年九月帰校後、寮に入らず、暫く北寮の受付所に住んでいたと記憶する。長谷川老人夫妻が受付役として受付所の建物に住んだのは明治四〇年四月以後のようである。大西は志摩で知り合いになった細木秀吉君という青年と、この受付所の建物に住んでいた。彼ら二人はそこで文字通り寝食をとめた。この細木君は同志社に入学はしたが卒業せず（大正九年校友会入会）、京都電灯会社に奉職して市内に家庭をもつようになつたが、比較的若くして他界した。温厚、親切な好人物であつて多くの人々から惜しまれた。

大西のことは翌四〇年の四月までは特筆すべきことなく過ぎたが当時の学園生活の一端を示すものとして、一、二の私事を記すことを許されたい。

私は三十九年の夏、大西君を志摩波切に訪ね、帰京後、西寮一寮におちついた。休中の残留寮生は皆西寮に移ったのである。私は三年ぶりに郷里に帰り、故郷の生活を一カ月半ばかり楽しみ、九月初めに帰校して北寮前寮に戻った。

九月十一日から第二学期の課業が始まり、私は食堂員（当時給仕の呼称であった）の仕事をはじめた。この学期も無事平穩で楽しい勉強をつづけた。漢文は門田新六先生の受持ちで教科書は孟子であった。論客としての孟子、道義家としての孟子はとも私の尊崇するところで、浩然の気の章、その他暗誦していたところが少なくなかった。その感化はいまも尚私の内に生きている。数学は立体幾何学で菊池大麓博士の英文教科書を用いた。先生は秦孝道先生であった。生理学は新帰国者三宅一博士の担当で、アデノイドボーンとかスフェノイドボーンとか英語名で教えられたことを記憶する。

九月二十八日、金曜日の午後、課業を終えて杉浦君と二人で比良登山のために江洲木戸に向かった。白川越、唐崎、雄琴、堅田を経て木戸ついたときは己に暗くなっていた。

「たけや」というはたごに泊まった。翌八時頃登山を始め、正午頃頂につき、西側に向かつて下山途中、途を失って迷うたが二時間後、漸く人馬の通る途に出て、途中、小出石、大原、八瀬を経て、寮に帰ったのは夜、八時頃であった。楽しいハイキングであった。その頃、学生の間には山岳部というものもなく、勿論アルピニストと呼ばれるような者はなく、遭難さわぎということもなかった。

十一月三日には男学校の、同五日には女学校の運動会が、それぞれのグラウンドで行なわれた。三十八年までは上賀茂神社の芝生で行なわれたのであるが三十九年からは自校のグラウンドで行なわれるに至った。

十一月二十八日には朝鮮統監伊藤博文公の秘書官古谷久綱先輩が来校した。彼は制服姿で腰に短剣を帯びていた。翌二十九日には若王子山上で墓前早天祈祷会が催された。恐らくは墓前祈祷会はこの頃から始まったようである。引き続き同日午前公会堂で創立記念式

が行なわれた。

十二月十七日から二学期の試験が始まり、二十一日終了式、二十五日にクラーク館でクリスマス会の祝会があり、三十一日の夜は、寮長、及川八楼君の室で讚美歌、祈祷を以って年を送った。

## 二

あけて明治四〇年になった。一月八日始業式があり、同十一日には新社長（四月以後各学校長兼任）原田助先生の歓迎会があった。

明治四〇年は新社長就任の年として記憶すべき年であった。新島先生歿後、同志社は小崎弘道、横井時雄両先生時代の難局を通過して、政治家であり、キリスト信者であった西原清東、片岡健吉両先生を相次いで迎え、明治三十一年から同三十六年の十一月まで無難に過ごすことができたのみならず、明治学院井深梶之助、青山学院本多庸一、麻布中学校江原素六、同志社西原清東など共同戦で同志社も他の三者と同様に、普通学校に徴兵猶子の認定を獲得した。次いで下村孝太郎先生の一任期を経て原田先生を迎えたのである。同志社内外の気運は漸く同志社にとって好転

し、同志社復興の曙光がさし始める時代となり、原田先生はその氣運に乗り、同志社を指導するに最も適わしい人と目された。紛擾にあき、平和を渴望するときに当たり、先生自身も平和を来たらす者と自負して就任されたものの如くである。

先生就任以来の慶事と發展については同志社五十年史にゆずり、また私事について述べたことを許されたい。明治四〇年は同志社にとって復興の緒についた記念すべき年であったが、私自身にとってもいろいろな意味で忘れたい年であった。私は食堂員のほか新たな仕事を兼ねるに至った。私は一月十二日から九寮に移り、学力の弱い生徒数名を預って補習教授に当たることとなった。この寮は狭い烏丸通りを隔てて北寮区域と相對し、グラウンドの西北部にあった。当時のグラウンドは現在の西半分ほどの広さで、その北部に教職員の住宅が二、三あり、九寮はグラウンドの西北寄りであった。この寮はそれまで短期間、善隣館と呼ばれ、台湾、中国などの学生の宿舍であったと記憶する。後に東寮、四寮の東側に移され、七寮と改名された。

私が預った生徒は五、六名であったが、毎

日一時間乃至二時間補習を手伝うた。主として指導したのは数学であった。このため月額五円五十銭の報酬を学校から受けた。この仕事は三学期一期で廃止された。

四〇年一月から三月までは私にとっては四年級の終りの学期であったが、学校には、いろいろなことがあった。その一つは食堂のストライキであった。一月二十二日私たちが働いていた西寮の食堂で賄征伐が起こり、お膳、飯櫃、その他の食器を転覆破壊し、大騒動を演じた。日頃声望を集めていた某君が食卓の長腰かけの上に立ち上がり、手をふって大声で一同をけしかけた光景が六十余年後の今日でもなお私の目に浮んでくる。私たち四人の食堂員は唯茫然として、見ているほか手の施しようもなかった。理由は食事が粗末になったという請負人に対する不満であった。この事件の後、始末が如何に行なわれたかは記憶しないが、私の知っている限りでは学校は何らの処分もせず、放任したようである。これは東寮食堂に波及しなかった。

この学期には名士の往来が目立った。二月四日には元社長の西原清東氏が見え、午後公會堂で講演があった。談の内容は記していな

いが、多分テキサス水田の談であったと思う。更に同月九日には島田三郎氏が入浴し、沢文に投宿した。十日午前、専門学校学生芥川光蔵君、普通学校上級の及川八楼君に伴なわれて同氏を沢文に訪問し親しくその声咳に接した。同日午後にはエール大学哲学教授ラッド博士がみえ、公會堂で講演があり、通訳は日野真澄先生であったと思う。同十五日には丹羽清次郎校長の送別会が公會堂で行なわれた。なお、十七日には下鴨檜垣で送別午餐会が催された。

ここで四年級の自肅運動について記すこととする。三月の始め私たちは同級の有志と相謀って、今日の所謂オーナー・システムを作ろうとした。その趣旨は試験場のカンニング、喫煙飲酒などの排除を目的とするものであった。三月四日午後六時から私の部屋に同級生浅野恵二、浅田三郎、明石純一、大岩修、杉浦忠三郎、吉村助運、山中平治、湯浅八郎、大野喜志松の諸君が集まり三時間にわたり懇談し、各祈をささげて解散した。そのとき右の目的達成のため「義正党」と呼ぶ団体を作ることになった。更に慎重を期するため五日の午後私の部屋に有志が集まり協議したが、そ

のとき中江利郎君が加わった。そのときの問題はカンニングがみつかったならば、即時その場で摘発するか、それとも、後程、忠告するかということであった。意見は硬軟二つに別れたが、何れとも決してかねて別れたようである。幸いに、当分カンニングをする者はわがクラスにはなかった。翌六日に公会堂東側の掲示板に「義正党」発会の宣言文をかかげた。文は私が草し、書は中江君の手によった。意外に反発の気はいなかった。越えて三月八日クラーク館内の青年会堂で党の集会を開いた。このとき入党したものは同級生、横浜捨四郎、芝本可四郎、金子節造の三君があり、クラス外から、神田林太郎、周再賜の二君が支援者として加盟した。大西君がこの運動に参加しなかったのは病身の故を以て控えたのだと思う。三月十九日午前私の部屋に集まり機関誌を発行することを議した。名称は「鳴潮」とすることに一致した。しかるにこれは私が健康を害し五年生の一学期中途で休学することになり、実現はしなかったし、党の活動も自然消滅の形となった。唯この運動は自分たちのクラスだけでなく他にも好影響を残したと思う。

今日一九七〇年代において湯浅八郎博士は「義正党」の話をして、私をひやかし、明治晩年の造反運動の発頭人であったと揶揄するが、それがあたらないことはこの運動の趣旨からみて明らかである。

当時の寮長会議の一つを紹介する。三月三日夜、寮長、及川八楼、水室真治、木原菊助、長谷川直吉、佐竹直重諸君のほか寮務係と呼ぶ役職についていた森松貞次郎君に私は九寮の特別生徒を預っていた関係でそれに列した。それは丹羽清次郎校長宅において開かれ、つぎのような申し合せをしている。

- 一、寮長に報酬を支給されることを当局は申し入れること。
- 二、不良学生を退学せしむるよう当局に進言すること。
- 三、寮構内にて菓子販売を来学期から禁止すること。

この寮長会の末席に列した私はつぎのような感想を記している。「惟うに近来各正義派の団結漸く現われて、茲に同志社精神の發揮をみるに至るを得ん」。大体このような空気が自然にただようのである。但し、党という仰々しい名前を用いた理由は自分にも

明らかでない。明治二十五、六年頃には直角党という嚴肅党があったと記されているが（同志社五十年史一七五頁）、明治晩年の頃にも今日のように主として政党に用いられるとは限らず、一般に団体に用いられたようである。

なお、当時の同志社の学生々徒の間には今日の造反学生にしばしばみるような、英雄気取りはなかった。学園の精神作興を叫びながら自が内面の罪意識が極めて強く、多くの者は理想と現実の矛盾に悩んだものである。そのため断食、寒中の冷水浴、祈禱など修練に苦勞する者が多かった。過日物故した日下部福太郎君の如きは十一日間も断食をしながら登校していて、遂に教場で卒倒して、そのことが知られたという例もある。従って荒川源太郎君（普、四〇、卒）や堀栄蔵君（普、四二、卒）の如く、また女学校高等学部英文科卒のT女史の如く身を救世軍に投ずる者が続出した。何分とも、山室重平先生が度々学校にみえ、またブース大将やモット博士の来京が相つぎ、いやが上にもキリスト教的精神が同志社生徒の間に燃え上った。なお、現実と理想との矛盾に苦悶した代表的な人は当時の神学生、今の修道所長、二瓶要蔵氏である。

う（同氏発行、宗教一九七〇年、十、十一月号「我が修道所を作るまで」参照）。

さてまた話を大西君のことに戻そう。彼は明治三十九年九月に志摩の療養から帰校して北寮の受付所に住んでいたことは前述の通りである。それは四〇年の四月まで続いたと思ふ。彼は四〇年四月、四年生の新学期を迎えたのである。然るに彼の病気は全快してはいなかったのみならず、むしろ進行の懸念すらあった。そこで友人たちは協議して彼を明石



前列向って左から小林大五郎、大塚節治、大西留吉  
後列、小原静一、及川八楼  
(明治38年3月受洗記念)

ど史跡を尋ね、塩屋、垂水、舞子を経て徒歩明石に到着、湊病院に行き同先生の診断を受け、残りの時間で人磨神社を訪れ、更に原忠美牧師を訪ねた。牧師は肺患のため十年も病床にあつて瘦せ衰えておられたが神色自諾、泰然たる姿をみてさすがに信仰の人であると感銘を深くした。また夫人の看護の様子にも

の湊病院に送って養生をさすことをきめた。そのために先ず、同病院に行つて診察を受け、且つ入院の手続きや経費のことなど調べる必要があるので、友人の内誰か一人彼と一緒に明石に行くこととなった。同行の役目が私に課せられたので私は四月三日正午彼とともに京都をたち神戸まで汽車、電車、神戸から須磨まで徒歩でゆき、海月館という旅館に泊つた。出発に当たり兩人の旅費として杉浦君から金九円を預つた。翌四日須磨寺や一の谷な

感心した。この頃、網島梁川の「病間録」や徳永規矩の「逆境の恩寵」など信仰文学が青年たちの間に広く読まれ、多くの感化を及ぼしたが、原牧師の信仰による闘病も同じものであった。その晩は湊病院の一室に泊り、翌五日湊医師を訪ね入院の手続などを相談、帰京の挨拶をなし、明石を立つて淡路に渡り、岩屋の灯台を見学し、仮屋に行き長松楼という旅館に泊つた。六日大阪に渡り帰京して、大西入院の準備の役目を終つた。大西君も私も全快の希望をもち、少しも沈んだ気持はなく、ともに数日の旅行を楽しむことができた。

大西君は四月十九日京都をたち、明石に向かった。大野喜志松君がこのとき義捐金を集めた。定まった病院の費用は誰がどのように苦面したか私には明らかでないが、多分杉浦君と神田君が負担したと思う。大西君のアルバイトの鐘つきは再び神田君が代行するようになった。大西君は翌四十一年の三月まで約一カ年間湊病院で養生し三月に帰校した。さて、私は四〇年四月から五年級に進み、宿舎は九寮から東寮、五寮に移った。ところが、数年来のアルバイトで身心を酷使したた

め、遂に神経衰弱となり、六月上旬から休学して郷里、広島の田舎に休養する身となった。詳しいことは後まわしとし、同年三、四、五月頃の出来事や人物の往来を記すこととする。

三宅驥一博士は三月限りで東京大学植物学助教授に転じられた。三月二十七日には卒業式があり、島田三郎代議士の講話があった。

その時の卒業生には食堂員仲間の遠山茂雄、神学校で親しくなった、長谷川直吉、佐竹直重、柔剣道の松岡一男、特にわれらの仲間として最初に記した森松貞次郎、名物男で救世軍に入った荒川源太郎の諸君がいたが今は皆故人となった。現存者には片桐哲、寺崎栄一郎その他合せて約一〇名の諸君に過ぎない。

三月二十九日には寮奉仕のゆえを以て学校より、ロビンソン・クルソーを頂いた。四月十二日にはジョーン・アール・モット博士、英国シンプソン博士の講演が市会議事堂であった。モット博士は衆知の如くクリスト教育年会の世界的指導者で日本へも度々みえ、日本の青年にも大きな感化を及ぼした人である。シンプソン博士は麻酔薬の発明者として著名な人ととき。

四月十五日には始業式があり、二十七日には原田社長の就任式があった。当日午後には雨中にかかわらず旗奪いなどの催しで歓迎の意を表した。五月九日にはブース大將が入浴し、市会議事堂で講演があった。原田社長の紹介、通訳は山室軍平氏であった。七十八歳の老翁は房々とした白髪、白髯神々しさを感ぜしめる風采の人であった。その講演の要旨は「青年諸君は余が天国において諸君と会するとき諸君が京都において余の談をきき、その教訓を実行して来た者であると述べ、互いに相樂しむを得んことを期待する」というにあった。

五月十一日夜中、食堂員仲間の同期生金子節造君が就寝のまま亡くなった。十三日告別式があり、若王子の墓地に埋葬した。五月十七日には大津美保崎でボート・レースがあり途中雨のため中止となった。五月二十一日にはグローバー先生が帰米した。

ここで再び私事について語ることを許されたい。私は数年来の過労に加え、五年生になつてから五寮の寮長を仰せつかり、一層の心労が加つた。その上、課業そのものが、五年生になつて忙しくなつた。四年生の終りまで

は学校外の書物を耽読することができたが、五年生になつてそれができなくなつた。私は神経衰弱となり、頭に錮を被つたようで、読書をして同じ場所を何遍も読み返しても頭にはいらないようになつた。いよいよ決心をして休学することにきめた。六月三日教頭波多野先生を訪ね、その旨を告げて諒解を得、六月五日帰郷の途についた。及川八楼、蠣崎敏雄、湯浅八郎、大野喜志松、足利緝、細木秀吉の諸君が駅頭に見送ってくれた。杉浦君は大西見舞をかねて明石まで送ってくれた。私も明石で下車して共に大西君を見舞い、且つ学友、柏木、沢田、美濃部三君の宅を訪問し、七日、明石を立つて広島にか帰、途中、可部町で恩医末元氏に立寄り、九日父母の膝下に歸つた。六、七、八の三カ月郷里で休養したが、その間におけることは凡て省き、つぎのことだけ記すこととする。

三十六年三月共に出郷した親友U君が学校を断念して家に歸つていたので、彼とは特に頻繁に往来した。七月下旬彼と他にY君という、高小時代の友人と私と三人で島根県浜田の有福という温泉に行つた。この温泉は精神病や神経衰弱などに特效があるといふので

出かけたわけである。三人は徒歩、中国山脈を越え、途中二泊して有福につき、三階楼という宿に入った。小さな宿であったが絵樺造りの立派な造作であった。今から三年前の一九六八年の夏、六十一年ぶりに同温泉に静養に行き三週間滞在した。昔の三階楼は火災に遭ったとかで見当たらなかった。有福観光ホテルという近代式の旅館に泊ったが設備万端よく整っていた。何分とも小山の谷間にある狭い町でできた谷川をはさんで両側に旅館や商店が並び長さ一キロ足らず、幅一〇〇米内外でみるところもない。長く滞在する者は退屈する。交通は浜田への定期バスがあり、広島県加計へ往復するバスもここに立寄る。道路は舗装されていて、交通は快適である。諸種団体の会合など頻繁にここで行なわれている。郷土芸能なども披露される。私もまたたま、八肢の大蛇退治をみる事ができた。なかなか立派なものであった。明治四〇年夏、同温泉から帰った後、二、三日間は頭の爽快を覚えたが、僅か一週間たらずの滞在中であったから、永続的効果を期待するものも無理であった。

かれこれしている間に九月になり、健康が

全く回復されたわけではないが、意を決して京都にかえった。九月二日に出郷、広島市に二泊、明石で下車、大西君を訪ね六日に帰校した。七日に教頭、波多野先生を訪問、復校の挨拶をなし、八日に総寮長、武田猪平先生を訪ね復校の報告をした。

九月十一日から学校が始まり、即日食堂員の仕事を始めた。四月に遠山茂雄君が卒業し、五月に金子節造君が死亡して食堂員は二名欠けたわけであるが、その後何人かそれを補充したか、はっきりしないが、中瀬古純一郎君が一人加わったのはこの頃かと思う。私自身六月初旬以後休業したのであるが、このアルバイトが私のために保留されてあったことは友人たちの好意によるものであった。また五寮の寮長の職も同様であったが、これは健康上の理由で辞表を出し、九月二十日付けで許可になった。

さてこの秋は、私は十一月の初めまでは食堂員と同志社時報の編集事務を手伝うて平穩に過ごしていた。学校においては九月二十日に新たに総寮長、武田猪平先生の歓迎会があり、十月三日には米國陸軍郷、タフト氏の来校、同十二日にはポート・レース、同二十六

日には上賀茂における同志社教会の親睦会があった。

ところが私は十一月一日から急性肺炎にかかり丁度五十日間大学病院に入院した。ここで再度休学するの已むなきに至った。十一月一日、秋期陸上運動会が運動場で行なわれた。私は頬に腫物ができていたので競技には参加せず、専ら世話役のようなことで奔走していた。ひる飯のとき食堂が作ってくれた折詰弁当を理科学館東側の庭で食べたが、さっぱり味がなく、体に熱があることに気がついた。五寮の自室にかえり臥床したが、高熱を発して、そのまま寝ついてしまった。数日間遠方にある便所に行くにも友人の肩にもたれて往復した。医師の診断は急性肺炎で重態であるから入院をせよということであった。友人たちの奔走により大病院に学用患者として入院することとなり、及川、杉浦の両君が付添い十一月五日に二病舎の個室に入院させてくれた。部長は笠原博士、主治医は横山省吾先生であった。約一週間余り四〇度を越す高熱が続き、血尿がでる有様で、友人は心配して私の親許に知らせてくれ、父と兄とが見舞いに来てくれた。天津の中村トヨ女が付添い

として看護してくれた。笠原部長週一回の回診のほか、特に浅山忠愛博士の来診を受けた。

私は意識は常に明らかであったが、一番苦しかったことは入院後間もなく、熱が四〇度以上あった頃、学用患者であったから、大きな講義室に引き出されたときである。笠原博士の講義中苦しい呼吸をしていたが、講義の終わったたん、学生が私にたかって胸部打診を始めた。付添っていた看護婦さんが遮ってくれたので助かった。一生のうち我が肉体的苦痛を感じた最大なるもの一つであった。

その看護婦は後でわかったのであるが、石黒牧師の令妹で同胞教会の信者であった。何分とも、この頃は、まだワクチンの注射というものがなかった時代である。高熱で苦しんでいるとき、見舞にきてくれた友人に愛宕山月輪寺の水が欲しいと訴えた。これは二年前の三十八年八月にU君と愛宕に登り、月輪寺の水に渴を医したことが思い出されたからである。後になって友人たちは「もし君が死んだら月輪寺の水を君の墓に供えてやろうと思つた」といった。友の情けの有難さを忘れ得ない。前後五十日入院の後十二月二十五日クリスマスの日に退院した。杉浦君が迎えにき

て、身の回りの品など片づけ、私を北寮につれ帰ってくれた。入院中は友人、寮生のみならず、女学校高等部の女性まで度々見舞に来てくれた。特に杉浦君は牛肉などの食料品を度々持ってきてくれた。また、この女性に対しては愛の負債が残っている。今となっては幽明境を異にして如何ともしがたい。天国において償うはかはない。「幾山河過ぎ越しかたを眺むれば友の情に涙こぼるる」一六十余年後の今日の感想である。人の情を「神の恵み」と読みかえ、友人への感謝とともに神への感謝は尽きない。

明治四十年大晦の夜は寮長、森松君の室に残留生たちが集り、あるいは祈り、あるいは「送歳休悲……」の詩を朗吟し除夜の鐘をききながらこの苦難の年を送った。

### 三

あけて四十一年となり正月二日故郷に静養のため京都を立った。森松、及川、周、佐竹（直重）、足利、釣部（一年生）の諸君に送られて西に向かった。杉浦君は明石に大西君を見舞うために同乗した。明石で下車して共に療養中の大西君を訪ねた。私は学友、美濃

部君の宅に厄介になり、三日広島に向かった。広島に一泊、可部町で恩医末元氏に一泊、五日父母の許にかえつた。大病回復の息子を迎えた老父母の喜びは一入であった。

三月末までの静養中は毎朝裏の小川に行き冷水摩擦をなし、しばしば近くの山畑や森に行つて祈り、ひまにまかせて読書と精神の修養に心がけた。新学年も近くなつたので三月二十三日郷里を出で、途中明石や神戸に立ち寄り二十五日京都にかえり、北寮におちついた。この頃大西君は已に明石を引き払い、京都に帰っていた。彼も帰校し、私も帰校し、われらの周辺は一時賑やかになつたが、三月二十六日卒業式があつて同級の友人は多く校門を出て行つた。ある者は早大にある者は一高に、ある者は三高に、ある者は米国へと同志社を去つた。同志社専門学校に残つた者は及川君だけであつたと思ふ。

四月から私は一年間約一〇〇円の奨学金を受けることとなり、もはや食堂員の仕事をする必要もなく、アルバイトから解放された。然るに六寮の寮長を命ぜられ断りがたく引き受けた。

四月六日北寮から六寮に移つた。大西君と

細木君が手伝ってくれた。六寮には専門学校生、及川八楼君のほか土佐の連中が数名いた。行宗貞隆、谷岡勝美、大脇順路、浜本浩の諸君である。その他台湾の林茂生君、戦前戦中大学々生主事をつとめた藤田義彦君、後に台湾の知事となった大磐誠三君、海軍々医中將となった福井信立君、また終戦後食糧欠乏の時多くの友人を助けた渡辺寛一君など異色の人物が多く、また一、二年の愛らしき少年も少なくなかった。

さて大西君は約一カ年間明石湊病院で養生したが病気が全治したわけでなく、伝染の可能性もないことはなく、彼の病氣は三十九年から足かけ三年にわたり、その間友人の援護を蒙ったことで校内にはあまねく知れわたっていた。そこで寮生の間にはそれとなく問題となり、学友は相談の結果、他に下宿を求めることにきめ、五月二十二日同君は塔之段桜木町の突き当りの寺の北側にできた新築の二階長屋の二階一室に移った。彼の心中の苦悶は察するに余りあった。彼が夜申若王寺山上新島先生の墓畔で祈ったことは一再ではなかったようである。私たち友人も彼とともに苦しんだ。私もこの学期は時々彼に代って彰栄

館の鐘をならした。

新学期が始まり、私は五年生の第一学期をくりかえすこととなった。四月十八、十九の両日学内YMCAの主催で山路愛山、安部磯雄両先生を迎えて講演会を開いた。安部先生は「理想の人」「理想の社会」につき、山路先生は「日本のキリスト教会」「宗教の実体と説明」と題し各二回の講演をされた。安部先生は更に十九日の日曜礼拝の説教をされた。日曜の夜はクラーク館で両講師を囲み、原田社長、財務理事の湯浅治郎氏、武田総寮長ほか学生有志の懇談会が開かれた。

第一学期は新緑の時節で殆ど毎土曜、一、二年の少年とともに近郊に遠足に出かけ、一学期はまたたく間に過ぎ、七月七日には学期試験も終って各自帰省の途についた。私は六寮を閉じ北寮前寮に移った。

七月十四日から二十八日まで学校主催の暑期学校が開かれた。松本亦太郎博士五回、浮田和民博士四回、牧野虎次牧師四回の講義があったほか日野真澄、高木壬太郎両先生の講演があった。松本博士の講義は実験心理学の問題であったが私はこれによって宗教と科学とが別の次元に属するもので宗教は理性を越



前列向って左より森松貞次朗、細木秀吉、大塚節治、杉浦忠三郎、竹林然彦、美濃部薫中列、山中平治、及川八楼  
後列、足利緝、浅野恵二（明治四十三年頃）

えたものであることを知るに至った。浮田博士は社会結合の原理につき、タルドの模倣説などを紹介されたことを記憶する。牧野先生は詩篇の講義をされた。

この夏八月七日から九月五日に至る約一月間、大西君と二人で京都大学医学部助教某博士宅の留守番をたのまれて同博士宅に住んだ。同博士一家は伊勢の海岸に避暑されたのである。毎日三度の食事は近所の仕出屋から運んでくれた。

その留守番中私は一人で小野郷村々長、和田氏を訪問した。令息喜治君が六寮々生であったからである。鷹峰から杉坂を越えて小野郷に至り同邸に一泊、高尾に出て京都に帰った。当時の少年和田君は今日、東京品川区和田外科病院々長の和田喜治博士である。

夏休みも過ぎ九月十日始業式十一日から授業が始まったが、課業のほか二、三記すべきことがあった。一つは組合教会総会が京都で開かれ、壮年、元老などの牧師諸先生が、市会議事堂で二回演壇に立ち、大講演会が催された。十八日の日曜礼拝もまた同所で行なわれた。同志社の学生や教員で、各会合に出席した者は少なくなかった。その二は、十月二十

一日同志社公会堂で原田社長が同十三日発布の戊申證書を奉読されたことである。これは日露戦争後、繁栄と平和のため国民が奢侈、軽佻に流れることを戒め、勤儉貯蓄を奨励されたものである。その三は、十一月二十七日

創立三十三周年記念式典が挙げられたことである。大塚素、横井時雄両先生の講話があった。その四は、同二十八日に女学校において寮長の慰勞会があり、デントン邸で御馳走になった。その五は同二十九日若王子山上に早

天祈祷会が催され、沢谷牧師の奨励があった。その六、十二月五日には鳴滝、御室、花園にわたり四、五年級(?)の発火演習があり、一日中銃をかついで走り廻った。この日の昼弁当の味は今もって忘れ得ない。

十二月十七日から第二学期の試験があり、二十四日に終わり、同夜クリスマス祝会がクラーク館であった。

この冬休みは二十九日から明石、美濃郡君宅に客となつて大晦の夜は明石教会における祈祷会に列席して歳を迎った。

明治四十二(一九〇九)年は私にとつても私共の仲間にとつても事件の多い年であった。親友大西君はいつの頃からか塔之段北の

下宿から六寮に移つて一階東側北隅の室に住んでいた。二月二十日から少し、体の調子が悪いようであったが、二十三日の午後、多量の咯血をした。大変だという知らせで、かけつけてみると、彼は胡座をかいたまま、両手を膝の上におき、口から泡の交つた鮮血を多

量に吐き呼吸も苦しく、自ら「戦いも終りに近づいた」といったが、なお微笑を堪えていた。私たちは手の施しようも知らず、暫く茫然としていたが、年長の及川八楼君が来て、私に向かつて「君は若く前途ある身だ退いて

おれ、自分が世話をする」といって、私を後に追いやった。私は誰が如何にしてこの重病人を世話したかはっきり記憶しない。とにかく、友人たちは東奔西走して、その夜、彼を

大学病院に入院させた。このとき、杉浦君は東京に、大野君は三高に去り、親しき友人は及川君、神田林太郎君、森松貞次郎君、足利緞君、細木秀吉君などであったと思う。郷里伊勢山田から兄弟、親戚が来て看護に當つたが約一カ月の後、遂に不帰の客となつた。

彼は明治三十七年の四月かあるいは九月に同志社普通学校二年に入学して以来五年の間苦学奮闘、不幸、病にかかり、五年のうち三

年は病と戦いながらの生活であった。彼は三十八年三月信仰に入り受洗した。彼の生涯は短かった。しかし彼は信仰によって自が苦難の途に堪えた。彼の問題は友人の問題であり、彼の苦難は友人たちの苦難であった。彼が、ヨブとともにもがいた如く、彼の友人たちもヨブの問題を自が問題として受取った。彼はその信仰により芳しき香りをその周辺に残した。「彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている」(ヘブル書十一の四)

私の鈍い頭、拙い筆では到底彼の真価を画きだすことはできない。彼の信仰は篤く、彼の徳義は堅く、彼の心は清潔であり、彼の情は暖かった。彼はユーモアに富み、人ざわりもやわらかく、圭角や刺がなかった。私は彼と最も親しい者の一人であったと思うが、彼から戒めらしい言葉をきいたことを覚えないう。彼はむしろ無為であった。唯一つ次ぎのことを忘れ得ない。塔之段北の長屋に彼を訪ねたとき雑談している間に、彼に來た手紙の切手の消印がはずれていたのをみて私は「これはもう一度用いることができるね」といつたら彼は「一度用いたものは二度用いる必要はない」といった。まことにつまりらぬ對話で

あるが、彼が寡欲であり奇麗な心の持主であると感じたことである。

彼の告別式は三月二十三日、クラーク館一階東北隅の室で行なわれた。参会者は室に溢れた。原田社長、波多野教頭、武田総寮長、諸先生を始め友人たちの弔詞があった。私も弔詞を読んだ。式後、彼の遺髪を新島先生の塋域に埋めた。その前日友人たちが雨を冒して掘った穴に。墓石は彼の郷里近くの二見ヶ浦から運んだものである。松本五平君と並んで永久に新島先生の近くに眠っている。学生の身分ではあったが、明治晩年に学園に開いた美しき花であつて、この塋域に眠る光榮に価するものであつた。

私がこれまで述べたことは、明治晩年における同志社学園の一グループの生活に過ぎない。学生生活は規模は小でも多方面にわたつていたことはいうまでもない。文芸を代表する人には、永代淑郎君や竹友藻風君、浜本浩君三宅周太郎君の如きがあり、弁論を代表する者には、及川君のほか神学部にも榎本修君、普通部四十一年組に阿部賢一君、四十三年組の神部四十一一年組に阿部賢一君、四十四年組の谷岡勝明万次郎(伊丹万里)君、四十四年組の谷岡勝

美君などが目立っていたようである。また柔剣道では普通学校四十年組の松岡一男君、同、四十一年組の嶋崎敏雄君などがあり、後音楽部各クラブの濫觴をなした人々には普通学校から神学校へ進んだ片桐哲、佐竹直重、長谷川直吉君などがあつた。野球も盛んであつた。同級生阿部賢一君、山中平治君などは同部の選手であつたと記憶する。弓道部もこの頃生まれもので、塩瀬千治先生、本部職員の下里貞次郎、藤田万右エ門両氏、学生では及川、森松、川野鉄蔵それに私もそのはしぐれに属した。加藤延年先生の感化により土曜日に植物採集に行く者、また史蹟をさぐる者も少なくはなかつたと思う。後者では考古学の權威となつた、梅原末治博士もこの頃の生徒であつた。

する。

(元同志社総長、現神学部名誉教授)

\*

\*

# ダウラギリ登頂記



同志社大学ヒマラヤ  
ダウラギリ登山隊長

太田徳風

同志社九十五周年を期し我等山岳部はヒマラヤ八、〇〇〇米の登山を試みる事とした。

過去十年間に亘りヒマラヤのアビ、サイパルの両初登頂と、アラスカのブラックパインに南米アンデスと輝しい記録を残し、これらの登山の仕上げというか、締括りというか、この期に八、〇〇〇米級への挑戦の自信がついた。若手O・Bの発案に端を發し、ヒマラヤ八、〇〇〇米級十四座の内、魔の山ともいわれるダウラギリ峰に目標を絞つたのである。過去四年間、ヒマラヤの入山は許可されなかつた。この間二度に亘りダウラギリの偵察隊を派遣し、臍ろげながらその全貌を把む事が出来たのである。計画第一歩の難関は資金問題であつた。何といつても八、〇〇〇米級である。アビ、サイパルの七〇〇〇米級とは異り、裝備に食糧に膨大なる資金がいる。どうして乗り越えるか、それにまだ経験のない酸素を使用せねばならぬ。次の難関は多数の隊員の選定と医者との同行である。ある程度の経験と資金力のある者を選定せねばならぬ。これらの難関を如何にして突破すべきか、そ

の自信は全くなかつた。たび重なる会合とあふれる熱意により次々とこれを克服した。幸い校友、O・B、学校当局のご理解と御援助により鹿島立ちが出来たのである。

昭和四十五年七月八日、一行十四名は喜び勇んで羽田飛行場をたつた。通関、入山の手続、ポーター集め等雑多な用務をすまし、八月二十日予定通りキャラバンに入つた。実にその数二三八名であつた。隊員はポーターの発着指揮、シエルパリの指示、皆よく働いた。隊長を始め隊員全隊一致団結、見事なチームワークにより、暑さ、風土病等の悪条件を克服し、九月七日、一行は無事目的のベースキャンプ(四、四〇〇米)に到達したのである。

ベースキャンプはまだモンズンが明けず、一行は約一週間の滞在。その間、雨の相間をみて高度順応にルート工作と隊員は多忙である。マヤンデー氷河は広くて、長い東面の主峰は肝を抜かれる程巨大なスケールの山だ。西面のダウラギリ2峰から6峰は見上げるのに首がだるい程高い山だ。雲と氷と岩の白、黒、褐色の三色のみ。時

と所をかまわず落雷のような崩雪と岩崩の連続だ。

九月十六日、モンズーンも明けいよいよキャンプIの建設が始まった。いよいよ本番だ。早速難関にぶつかつた。まず第一はベースキャンプとキャンプIとの間にある大きなアイスホールである。モンズーン明けで氷が崩壊する。日々の荷上げに危険極まりない。シェルパーはしばしば落下し、隊員もその一歩手前まで危険に晒される。スイス隊はここを通る事なく、飛行機で荷物を運んだのだ。次の難関は十月五日から三日間に亘る大雪が降り、テントに閉じ込められた。これで荷上げルートと登頂ルートのやり直した。予定が十日近くも遅れてしまった。短いポストモンズーン（ヒマラヤの秋）だ。ボヤボヤしていると冬將軍がやって来るのだ。隊長もあせり、隊員もあせつた。大自然には勝てない。第三の難関はキャンプIIIからIVへのルート工作中、B班四名とシェルパー二名が、新雪表層雪崩に流された。幸い打撲傷程度で済んだものの、時計、帽子、眼鏡等を失つた。隊員の士気は鈍る。日数は容赦なく立って行く。

第四の難関は隊員が高山病にやられ始めた。キャンプIVは高度六、九〇〇米だ。空气中の酸素は平地の半程度しかない。過激な登攀や荷上げに身心は疲労の極みに達したのだ。平行神経を失い、涎をたれたり頭痛、嘔吐、鼻血を出す者まで出始めた。だが天は我らに味方した。その後好天が続き、キャンプV、VIと着々と設定された。だがアイスバーを雪面に打込みこれにフィックスロープを通した。実に延々三、〇〇〇米に亘る難作業だ。身を粉にして作り上げたルートだ。隊員の石にかじりついで執念が逐に川田登攀隊長をとうとう登頂に成功せしめたのだ。正に昭和四十五年十月二十日午前十一時四十五分であった。

この報をトランシーバーで受信した時は、隊長は勿論隊員一同小躍りした。涙が自然に出て来る。日本を発つて七十三日目の待ちに待った劇的な瞬間であつた。



一行は十月二十三日ベースキャンプに無事帰つてきた。隊長と隊長は嬉しさの余り抱き合つて喜んだ。我々の目的は成功したのだ。校友の皆様を始め親兄弟、妻子に喜んでもらえる。やれやれた。

帰りのキャラバンは足も軽く一行元気にポカラに着き、思い出深きダウラギリ登山も終え、十二月初旬無事帰国した。重に学  
校当局、校友、O・B、父兄の御援助によるもので、紙面を拝借し厚く御礼申し上げます。

(昭和九年、高商卒・日本山岳会々員)

# 私 の 見 た 米 国 の 大 学



ミシガン大学キャンパスの筆者

## 北村金之助

てきた私は、一工学部事務長として米国の私学の財政、ティーチング・アシスタントの制度、コンピュータの利用、学生問題などに ついて、せん越ながら若干述べたいと思う。

### (一) 私学の財政

#### A、寄付金

私学の収入は米国においても日本においても学生負担金、寄付金、政府補助金、補助事業収入その他からなつて

いる。寄付金は最近約七%前後(表一)を占め、全予算における比率はやや漸減の傾向をたどつてきつつある。

しかし、これを日本の私立大学の現状と比較した場合、たとえば同志社大学の四十五年度当初予算では、わずか〇・六%であるのに対して、米国の寄付金ははるかに高い率を占めているといえる。

この両者の相違の原因の一つは税制に関係がある。すなわち個人の場合でも企業の場合でも、学校への寄付金が課税の対象からはずされることは米国、日本とも同様である。

にもかかわらず米国のハーバード・カレッジ(Mr. Mason Fernald, Associate Director of Harvard Fund Office の談(注よび資料))が最近その卒業生に対して行なつた募金の結果によると、卒業生五万人の内、約三十五%が寄付金を拠出したこと(応募者の中では戦争未亡人、財産相続をした人、一時に多額の金をもうけた人が高額の寄付をするということである)また、エール大学では約五十%が拠出していることなどは、日本の大学と比較して大きな相違点となつて現われてきている。なぜこのような違いができたのであろうか。私は、まず第一に免税の手続きが複雑であること、そして第二に、学校へ寄付をした場合、課税の対象にならないという近年改正された税制が、日本の人々によく理解されていないことなどがあげられる。ゆえに寄付手続き簡略化の運動を行なうと共に、税制の改正されたことを大いに宣伝して教育への社会的関心を高める必要があると感ずるのであ

日本の同志社という背景を持つ私は、青々とした緑のミシガン大学のキャンパスに立つた時、何かを記録し、何かを訴えたい衝動にかられたのである。

昭和四十五年度研修員として、夏から秋にかけて米国の州立、私立の十四大学を訪問し、ヨーロッパを経て三カ月後再び同志社に戻つ

る。

また、米国ではサラリーマンが学校に寄付する場合、その金額と同額を会社自体も寄付する制度をもうけているところが多い。ただし、その金額に限度をもうけている会社もある。たとえば自動車会社のフォードは最高を五千ドルとしている。会社としてはその見返りとして学校から立派な卒業生を社員にと希望する。この制度を Matching Gift Programs といひ、これによって両者の関係は非常に良くなっている。日本においても、このような制度をとり入れていくことができないものであろうか。

次に、米国の社会にはファウンデーションが約千程あると言われている。(エール大学に Mr. Patrick Moore, Assistant Comptroller for Funds, Investments and Grants の談) 各大学は多数のこれら財団とコネクションを持っている。このような財団を持たない日本の私立大学にとっては実にうらやましい限りである。これも日本と米国の教育機関における寄付活動に決定的な差異をもたらす社会組織の相違点ではなからうか。

右のような事情のために米国では寄付活動

が日常的に無理なく行なわれていて、大部分の大学では募金局が学長事務局の協力のもとに毎日、財団、先輩、会社、個人に対する寄付活動をしており、数年に一度は大規模な募金運動を行なっている。その掲げる目標は、建て物の建設、研究費、奨学金、教職員の給料などに分かれる。

大規模な募金の際には、フルタイムの職員以外に多数の卒業生が無報酬で募金に従事し、その募金額を競うという状態であつて、教育に対する関心、使命感が日本と少し違ふようである。

右に述べた諸事情が互いに影響し、結合して、大学の財源に多大の貢献をしているのである。

#### B、補助事業

スタンフォード大学では、土地、建て物の貸し付け事業なども行ない、その町全体がスタンフォードのものであると聞いているが、私が訪問調査した大学では所有の土地がスタンフォード大学ほどに広大でなかつたためか、大学の補助事業というのは寄宿舎、食堂および病院の運営がそのおもなものであつた。例外としてニューヨーク大学がキャンパス・

ストーリーを、コロンビア大学がボーリングを経営しているに過ぎなかつた。各事業は収支相償うようになっていて、日本の私立大学のように一般学生の学費から不足金がまかなわれているようなことはなかつた。そのため設備のととのつた寄宿舎の場合には、その住居費はむしろ民間のアパートよりも高いものがあつた。

私は米国の私立大学における今後の補助事業について各大学の指導者にその見解を聞いたのであるが、寄宿舎の増設、書籍の出版事業という希望が若干あつた程度である。そして大きなビジネス・エンタープライズによって収益をあげ、大学運営の一般経費に充当することは大学が教育事業であり、非営利法人であるため、好ましくない、あるいは法律違反であるとする見地から、すべての指導者は全く否定的であつた。しかしながら、大きな基金を持つてゐる大学はその基金を株、社債に投資してその利益を図ることに苦心をしている状態であり、その方面では利益を図るための事業は認められていることになる。この事は日本においても同様であるといえるが、アメリカでは基金投資から得る配当、利

息その他の果実の収入が予算の二十%を占めている大学がある。日本の私立大学ではこのようならば、少なくとも寄宿舎、食堂、印刷関係の運営では収支が相償うように改められねばならないと私は思うのである。また、補助事業といえないが、ある大学では、研究した成果を民間会社の希望により、その資料の送付料として年間約二万ドルを会社から徴収している。だが実際に要する費用としてはその十分の一位であつて、その差額は研究の労力費に相当するものとして、それを一般財源に充当している大学もあつたことをつけ加えておきたい。



スタンフォード大学の新校舎の一部

C、国庫補助金  
米国における国庫補助金のうち研究費、奨学金は大きな率を占めるものである。研究費

は日本の文部省科学研究費のようなもので、教員が研究テーマについての説明書と共に申請書を提出し、政府がその研究費を支給するという形をとっている。ただしその中にはその研究に携わつた人間の人件費も含まれている。

国庫補助金が総予算に占める率は過去十年間に五十%以上の増大を示し、ある大学では約五倍にさえなつてゐる。(表II)

現在、その金額が大学全体の総予算に占める率はM・I・T.では約八十一%、エール大学では約三十五・四%、ニューヨーク大学では約三十三%を占めている。(表I)

この率は大学によってかなり大きな差を見せている。補助金が少なく寄付金収入も少ない大学は、自らの収入によって教員の研究費をまかなつていかねばならないので大学の財政は苦しく補助金の増大を切に願つてゐる状態である。しかるに最近、研究費の補助金は増大せず逆に減少の傾向にあり、各大学のすべての指導者は頭を悩ましていられた。その原因は私などの憶測できることではないが、民間一般企業の研究費にまわされてゐるのではないかと、話してくれた知人もある。奨学

金は幾種類にも分かれるが、機能別に大きく分けると、スカラシップ、フェローシップ、ローン、グラントの四種類に分類される。ミネソタ大学において奨学金の約六十%が政府補助金であるという事は、奨学金において政府の補助金が大きなウェイトを占めてゐるといふ得る。ミネソタ大学(総学生数、約五万人)の場合、上記四種の奨学金の内、一つまたは二つ以上の奨学金を得ている学生は約九千人あり、別に銀行ローンを受けてゐる学生も約九千人いゝ。(Mr. Samuel R. Lewis, The Assistant Director in the University Office of Financial Aid の談)つまり計約一万八千人が何らかの形の奨学金を受けてゐることになる。この銀行ローンは、在学中の利息を政府が学生に代わつて払い、学生は卒業後、七%の利息を支払いながら返済することになつてゐる。したがつて政府は奨学金に関しかなり大幅な援助をしてゐるといわねばならない。

日本においては国立大学の授業料は極端に少額におさえ、育英会の奨学金も国立大学には多額の金額が支払われている。このことは決して悪いことではないが、学生数の約七十

%を占めている私立大学の学生―彼らは悪条件のもとで高い学費を払っている―にも、奨学金をもっと多く支給すべきである。国庫補助金としてはこの外に、寄宿舎の建設費用、あるいは支出の対象となった研究の建て物建設費用の貸与または補助がある。総予算の八十一%を国庫補助金でまかなっている M・I・T の Mr. Malcolm G. Kispert, Vice President, Academic Administration は「研究のための費用は国家が補助すべきであるが、教育のための費用は学生が負担すべきではないか」という見解を持っている。ニューヨーク大学は総学生数約四万四千人でありながら寄付金収入が少なく、また国庫補助金が三十三%を示している。大学の Mr. Tre-dwell Hopkins, Treasurer が「現在の学費は学生にとって負担が多すぎる。国庫助成の大幅な増額が必要である。」と述べている。またノースイースタン大学になると Mr. Bareson, Vice President for financial problems は「研究費補助金は大学の教育面に対する直接の財源にならない。本学は研究のための国庫補助金を除外すれば、総収入の七十五%が学費でまかなわれていく。国庫補助金は教育

面にも学校運営上是非必要である。」と、強い要求となって表われているのである。

しかるに日本では、本年度ようやく私立大学に対する国庫補助の制度が改善されたに過ぎない。補助金は大幅に増額されたが、それよりも同志社大学の総予算の僅か五%（当初予算）という状態である。文部省は毎年増額することを言明しているが、米国は過去十年間の努力の後、大学の総予算に占める国庫補助金の率を五十%以上増大せしめた。日本の経済発展力からすれば私立大学の結束努力によって少なくとも教年間のうちに米国の程度にまで追いつくようになりたいものである。

#### D、学 費

全般的な傾向として、過去十年間において米国の大学の学費収入が総予算に占める率は大幅に減少してきたようである（表Ⅱ）。一方、学費の単価は各大学において種々であるが、大ざっぱにいって州立の場合には千ドル内外であり、私立の場合には、ペンシルバニア大学の二、一五〇ドルからニューヨーク大学の四、四〇〇ドルまでいろいろあり、概して三千ドル内外と思われる。

国庫補助金が最近漸減している関係上、M

・I・T・、ハーバードのような一流私学は別として一般の私立大学の学費は次第に高くなり、ニューヨーク大学の副学長は、学費負担の限界であると言明しておられた。同時に次第にマスプロ教育に向かって、年々新入生を増加している大学もあつた。州立大学においても学費の値上げは最近しばしば行なわれ、たとえばミネソタ大学は二年ごとに値上げをし、ミシガン大学は過去五年間に三回、学費を値上げしたようである。

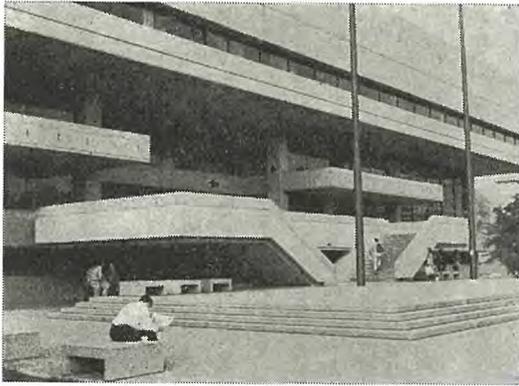
私立大学における三千ドルの学費は日本円に換算した場合約百万円であるが、日本では三十万円程の感じを受けるのに相当する。

しかし米国では政府、州、学校からの奨学金財源がかなり多く、たとえば前述のミネソタ大学では約三十六%の学生が何らかの奨学金を受けていることになる。このようにみても日本の私立大学の学費は米国に比べると安く、また、その政府奨学金も極端に少ないというのが現状である。これは悪循環を繰り返しているのであつて、設備も教育条件もしたがって悪いという結果になっているのではないだろうか。日本においても政府補助の奨学金を大幅に増額せしめねばならないのは、

前述の国庫補助金の項で述べたとおりである。

### E、今後の展望

日本は徳川時代すでに教育普及率は世界中でも高い率を示していた国であるといわれている。明治以後、先覚者達が義務教育の徹底化を実現したことが国力の進展に大きな原動力となったことは周知のとおりである。第二次大戦後、経済社会の発展はさらに高度の教



M. I. T. の校舎

育を受けた人間を多数需要するようになり政府はその供給源の大部分を私立大学にもとめてきた。日本の貧しい国力の中でその責務を負った私立大学の苦闘の歴史が新しく始まったのである。そのマスプロ教育は教職員のオーバーワークとなり、学生の不満となつてさまざまな波紋を投げかけてきたが、教職員、学生のなみなみならぬ努力は立派な卒業生を送り出すことによつて国力の発展に最大の貢献をしたといひ得る。このことは米・ソに次いで、大学進学率が世界第三位となる一方、国民総生産も第二位になったことで如実に示されている。このことは政府の私立大学に対する政策が結果として成功であつたともいえるが、現今ようやくそのヒズミは大きくなり、もはや限界に達してきたようである。また、経済力は豊かになり、一台のゼット機に要する費用で私立大学が大きく潤う状態になつてきたことを考えると、まさに私立大学政策の大きな転換期にきたことを感ずるのである。本年度より私学振興財団が発足し、政府の姿勢は本腰をいれるようになってきたが、私立大学はたゆむことなくその振興のための政策の推進を政府にもとめねばならない。日本の

経済社会機構が米国と同様である限り、その進む道も同様であると想像される時、やはり国庫補助の増額と寄付手続きの簡易化とその宣伝、マッチング・ギフト・プログラムの導入と寄付財団の設立、社会の大学教育への関心の昂揚、大学運営の合理化へと進まねばならないと思うのである。

### (二) ティーチング・アシスタントの制度

ティーチング・アシスタントとは授業補助者の意味であるが一概にティーチング・アシスタントといつてもその呼び名はさまざまである。たとえばミネソタ大学ではティーチング・アシスタントとティーチングアシリエイトの二種があり、ミシガン大学ではティーチング・フェローとティーチング・アシスタントの二種類、ペンシルバニア大学ではティーチングフェロー、コロンビア大学では単にアシスタントなど、いろいろである。ここでは一括して日本語で「授業補助者」と訳しておく。

### A、役割

授業補助者には主として大学院の学生のうち、優秀な者が選ばれる。選ばれるといつて

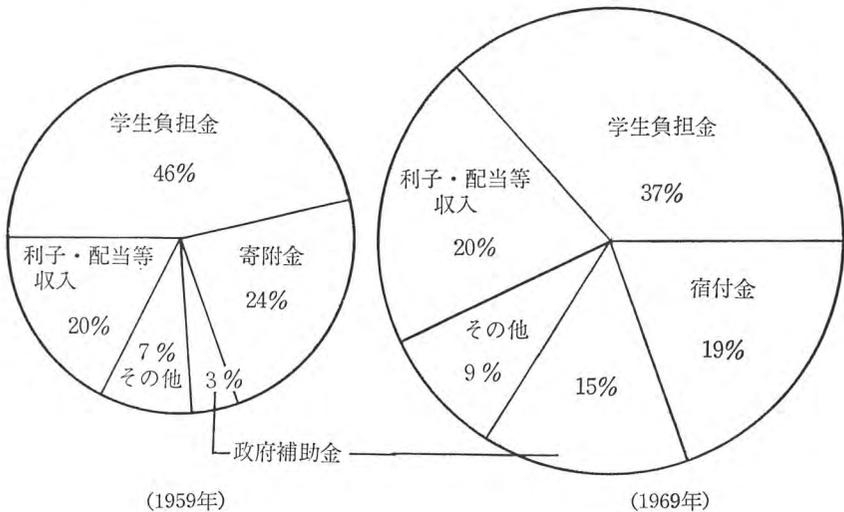
(表 I)

	学 生 負 担 金		利 子 ・ 配 当 収 入		補 助 金 収 入		補 助 事 業 収 入		寄 付 金 そ の 他 収 入		合 計	
	千円	%	千円	%	千円	%	千円	%	円千	%	千円	%
ニ ュ ー ヨ ー ク 大 学 (1969,8)	51,130	29.3	10,770	6.2	58,130	33.3	43,500	24.8	11,290	6.4	174,820	100.0
M. I. T. (1969,6)	17,640	8.6	7,350	3.3	176,210	81.2	5,970	2.2	10,340	4.7	217,510	100.0
ペンシルバニア大学 (1969,6)	30,090	20.1	6,490	4.3	37,590	25.1	65,390	43.6	10,340	6.9	149,900	100.0
エール大学 (1969,6)	22,060	19.7	28,860	25.9	39,620	35.4	13,790	12.3	7,500	6.7	111,830	100.0
ハーバード大学 (1967,6)	33,100	21.9	30,880	20.4	55,430	36.6	10,590	7.0	21,350	14.1	151,350	100.0
南カリフォルニア大学 (1969)	29,270	37.0	2,560	3.0	28,900	36.2	14,700	19.0	4,320	4.8	79,750	100.0
シカゴ大学 (1969)	20,290	14.5	11,600	8.3	34,940	25.0	41,280	29.7	31,390	22.5	139,500	100.0

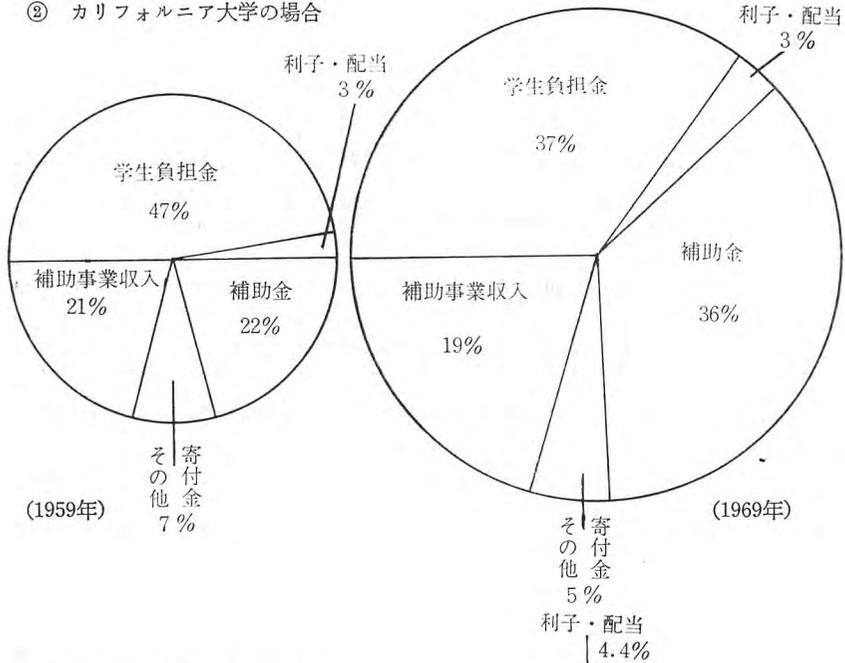
(表 II)

## 過去10年間における財源の推移

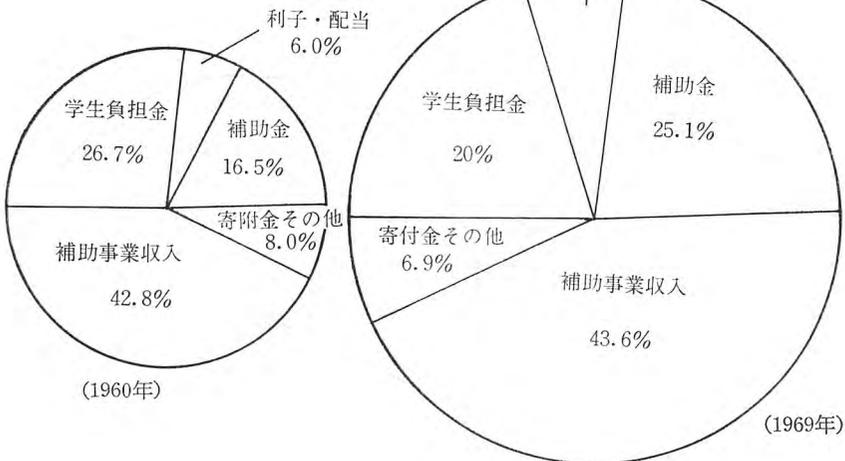
① スタンフォード大学の場合



② カリフォルニア大学の場合



③ ペンシルバニア大学の場合



もまず、希望者を募り、その中から選考されるのであるが、大体二つの種類にわかれている。一は学部の一、二回生の授業の補助を行なう。すなわち教授の責任においてクラスを受け持ち講義や討論の指導を行なう者である。この業務を受け持つ者は特に優秀な者であり、また熟練している者である。たとえばミネソタ大学では二十人〜三十人のクラスを二クラス週三回担当

する。(二回四十五分)ノースイースタン大学では二十人位のクラスを週五回担当する。(一回五十分)このようにおおかたの大学では大学院生がこれを担当するが、例外としてボストン大学では政治学部四回生の学生が新生のディスカッション・リーダーを担当し二十人、三十人のクラスを受け持っていた。彼らはそれによって単位を取得することになっているのであるが、Dr. Newman, Dean of the College of the Liberal Arts は「しかしながら教授の指導のもとで「アシスタントがリードするのが望ましい。」と付言していた。

授業補助者のもう一つの種類は教授の授業準備、採点など、授業の間接的補助業務を担当している者である。このアシスタントも主として大学院の学生であるが熟練度が前述の補助者程でない者によって構成されている。私がこの問題について質問したアメリカの大学の幹部達——ミネソタ大学の Francis M. Boddy, Associate Dean, ミシガン大学の Mr. Charles Allamand, Assistant to the Vice President for Academic Affairs, ペンシルバニア大学の Dr. David R. Goddard,

Provost of the University, コロンビア大学の Mr. Heroy Drenning, Dean of the faculty, ノースイースタン大学の Dean Shepard (ケリー教授の義弟) ボストン大学の Dr. Newman, Dean of the College of Liberal Arts——は異句同音に次のように述べられた。すなわち「これらの授業補助者の制度こそ、現在の多人数教育の弊害をかなりの程度カバーすることができる。」と、学生は大教室で教授の講義を聞いた後、小クラスに分れて授業補助者の指導で討論を行なう。また、彼の講義を聞くことによって教授の講義を更に深く自らのものにする事ができるのである。

#### B. 報 酬

このような制度が米国で成功している理由の一には、大学院が充実していることであり、二には、彼らがその業務に従事することによって教育に関する自らの経験を深めてゆくことができ、また自らの勉強にもなり得ると言うことである。そして三には、自らの経済生活がある程度保証されているということもいえる。たとえばミネソタ大学(州立)では年間三、四千ドルの報酬を支払う。また、ペンシ

ルバニア大学(私立)では、学費に対して奨学金を支給し、別に年間二千九百ドルを給与として支払う。私立大学の場合、学費が高いのでそれをカバーして別に給与を支給しているのである。(ペンシルバニア大学の学費は二千五百五十ドルである)ノースイースタン大学の場合も、学費に対しては奨学金を支給し別に二千八百ドルから三千ドルを給与として払っている。三千ドルは邦貨に換算すると約百万円であるが、日本では約三十万円程の感じであり、一カ月にして約二万五千円の報酬を受けていることになる。

#### C. 授業補助者の数

授業補助者の数については、あまり詳細に調べることはできなかったが、ミネソタ大学では大学院生一万人の中、その二十五%が授業補助者、または研究補助者になっている。すなわちティーチングアシソシエイト七三九人、ティーチングアシスタント九八八人、リサーチアシスタント六六三人である。ペンシルバニア大学では大学院生約八千人の内、四三一人がティーチングフェローになっていゝる。(学部生は約七千人)ノースイースタン大学の場合、学部生約一万人に対し授業補助

者の数は約二百五十人である。以上の諸大学の現状から推測すれば、学部の一、二回生に対する授業補助者の数はかなり高いと思われるのである。

### D、今後の展望

前述したようにアメリカにおける大きな大学の指導者層は授業補助者の制度が多人数教育の弊害の是正に大いに役立っていることを強調された。米国以上の多人数教育を行なっている日本の私立大学も、この制度を大いに取り入れる必要があるのではなからうか。もちろん米国と日本とは諸種の事情が異なっている。たとえば日本の国立大学では公務員法がしかれているため、この制度の導入は今のところ不可能といわれている。また、日本の私立大学の大学院の学生数も米国の大学院を昔の旧制大学なみの対学生数の比率にまで増加させることは不可能に近い。しかも高等教育を受けた人間を求める社会の要求がますます高まってくる今後を思えば今のところ、大学院を充実するかたわら、この制度の受け入れ態勢を一考すべきではないかと思うのである。

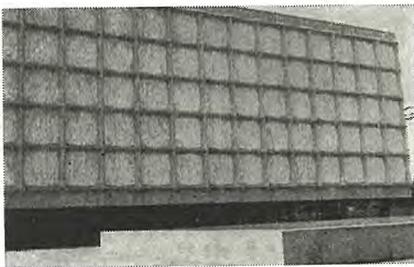
### (三) 電子計算機の利用

電子計算機の大学アドミニストレーションへの利用は米国においても他の一般企業における利用とくらべて最も遅れている (Mr. Dir. Dix, Assistant Director of Computer Center in Harvard University の談) といわれている。従ってその利用の程度は大学によって大きく異なり、極めてまちまちである。

すなわち、大学へのコンピューターの導入が一九四六年であり、その歴史が最も古いといわれているペンシルバニア大学(学部生七千四百人、大学院生八千百人)では、登録業務、学生業務、図書館業務、病院、会計関係、長期計画立案などあらゆる業務に使用され、十四カ所のコンピューター・ターミナルからすべての情報がコンピューター・センターに集中する。コンピューターは二十台備えてあり、センターには七十人が、各ターミナルには二、三人が業務に従事している。センターの小型テレビよりの画面にはボタンを操作することによって学生個人のあらゆる記録―登録、成績、年令、現住所、本籍地、家族調書

等一が瞬間的に現われるようになってくる。Dr. David N. Freeman, Director of the Computer Center はアメリカの大学で事務面にコンピューターを最大限に利用している大学は当大学ではないかと述べられた。私も十四大学を実際に訪問して同様に感じた。

一方、ハーバード大学では図書館業務を除きやや遅れているようである。すなわち学生の登録には使われていない。したがってコンピューターによる学生記録はまだ十分ではない。会計関係にはある程度、使われているようである。私は図書館業務については専門家でないの



エール大学の図書館

で詳しいことはわからないが、その蔵書数万冊の分類ごとの名簿を全部テープに納めることによ

って、完全な管理と迅速な運営が行なわれているとの説明であった。しかし図書館の数が非常に多いことと、特殊な書籍があるために、学生への貸し出し業務に利用することは困難であるらしい。また、コンピュータセクターの副所長ディックス氏はコンピュータの導入を推進するためにまず職員に対して定期的に講習会を開き、それらの職員を通じて各パートの上司にその利用についての意見を申させよう努力をしていることを聞き、参考にすべきことであると思った。

ミシガン大学では学生への図書の貸し出しに役立っている。同大学で研究していられる市瀬昌夫先生(同志社香里高)の談によれば、本人の名前のはいったカードと貸し出しカードとをコンピュータに処理させることによつて図書の管理(延滞料の計算事務を含む)を行なうことができるということであった。また、この大学は一九五二年にはじめて導入したのであるが、新入生の登録業務には利用されていない。その理由は、新入生の登録はあとから変更せざるを得なくなること、各スクールがそのカリキュラムについて自由権があるため統一した形でとらえにくいという

ことであった。ゆえに学生記録には一部しか使われていないが会計関係(記帳、給料その他の支払)、財政報告、建物利用研究、長期計画、財政計画には大いにコンピュータが使われているようであった。この点、カリフォルニア大学バークレーにおいても同様の傾向であった。また、一九六二年に導入したミネソタ大学では、学生記録に関しては完全に活用され、小型テレビのような画面にその記録が瞬間的に現われ、プリントされる仕組みになっていることはペンシルバニア大学と同様である。また、会計関係にも利用されているが、しかし長期計画作成のための総合的な方面についてはまだ十分とはいえないようであった。この点、シカゴ大学も類似の傾向があるように思われた。

エール大学、ニューヨーク大学では会計関係、学生記録の一部および図書館業務の一部に利用されているが登録業務、長期計画作成に関しては開発途上にあると思われる。  
ニューヨーク大学の Professor Max Goldstein, Courant Institute of Mathematical Science の言によれば米国の大学においてもコンピュータをすべての事務に利用してい

る大学はないのではないかとのことであった。日本においては従来から入試の点数計算および資料作成にのみ利用されてきたが、同志社において私が出納課長であった時、学費納入とその管理、督促状、その他の関係資料の作成にもコンピュータを導入し、昭和四十四年度より実施した。現在多くの大学にてその制度がじょじょに実施されてきている。ただ例外的に最近新しく設立された大学ではその利用がかなり広範囲になっているが、全国的には、いまだしの感がある。

しかしすべての点において米国の大学の方がすぐれているというわけでは決していない。たとえば大学の出納課の窓口では学生が学費納入のために長だの列をなして並んでいる。五万人の学生数を持つといわれるミネソタ大学では数十人の出納課員が窓口で忙しくたち働いているのである。その点、同志社の場合、納入用紙自体が直接コンピュータに処理される仕組みになっていること、また、銀行振込を原則としたことなどにより、約二万人の学生をかかえているにもかかわらず、その業務をわずかに四人程で処理しているのである。米国の大学とは比較にならない程、合理

化されているのであって、ミネソタ大学の指導者はその合理的な仕事の仕組みに感心された次第である。

米国では人件費が高いためにコンピュータの開発利用は急速に広まったのである。日本においても次第に騰貴する人件費と労働力不足の現状から、これの利用はますます増加する傾向にあり、大学においてもその広範な利用に努力を傾けなければならないことはいうまでもない。新しくコンピュータを導入する際、米国の大学においても、職員の反対にあったが説得の上、使用した結果、結局喜ばれたそうである。また、この際、人事問題では、職員を解雇した大学はなく、すべて配置転換、自然退職によって解決している。ミネソタ大学では一九六二年に導入した当時、三万五千人の学生数が現在の五万人と大幅にふえても職員の人数は以前のままであるという Mr. Ralph J. Willard, Manager, Data processing Center の言葉をつけ加えたい。学生数の少ない大学では、非常に高価なコンピュータを導入することはきわめて困難であるとの見解を持っていたのであるが、アーモスト大学はみごとにこの問題を解決して

いる。すなわち、アーモスト大学ではその近辺の三大学——マウントホリオーク女子大、ミス女子大、ボントン州立大——と共同利用し、そのレンタル料金を分担しているのである。米国程に人件費が高くない日本においては、近辺の大学が共同利用し、いずれかの大学にセンターを設置し、非常に安い料金で多くの業種に利用すれば、事務能率は高くなり、学生へのサービス向上となる。一見、夢のようなはなしと思われるが、是非一考を要するものと思う。

Dr. Robert Bartels, Director, Computing Center of the University of Michigan のことばによれば、オハイオ州 Bowling Green 市の Institute of Bowling Green (学生数約八千) のプログラムが実にすばらしいということである。残念ながら私はボーリング大学に行くことが出来なかったが、この大学と、コンピュータ利用の普及しているペンシルバニア大学、共同利用を行なっているアーモスト大学へは、是非今後の研修員の方に、研究にいったいだきたいと私は希望する。

#### 四 学生問題

米国では、学生は学校行政とどのような形で接触しているであろうか。このことはきわめて興味のある問題であると同時に非常に難しい問題である。詳細な調査を必要とするのであるが時間の関係上、概括的なものしかつかめなかったことを心苦しく思うが次に少し紹介してみたい。

学校当局と学生との意志を疎通さすために、カリフォルニア大学バークレー(学生数二万八千)では七十人の学生委員がその任務に従事している。彼らは学生から色々な意見を聞き学長にアドバイスを行ない、また、学



カリフォルニア大学バークレー校舎の一部

長の方針を学生に伝えて、ちょうど、そのつなぎ目の役を果たしている。ミネソタ大学の場合、Dr. James Reeves, Associate Vice President for Student Affairs の説明によれば彼らは University Senete に参加している。その構成は教授百四十人、学生六十人からなり、学生の意見を聴取する機会を設けている。しかし、この場合、注意を要することは、ユニバーシティ・セネトは人事や財務問題については討議の対象にならないということと、決定権を持たないということである。また、学長選出に際しては各キャンパス（五つのキャンパス）ごとに教授、学生、校友からなる委員会を設け五百人の候補者の中から次第にしぼり、最後の一人が理事会で承認、決定となる。ここに余談となるが米国の大学では職員は学長選出権を持っていない。そこで私はミネソタ大学のリーブス博士に同志社大学の選挙規定を説明したところ、博士は非常に興味をもって聞かれ、自分達も学ばなければならぬと話された。この点について他の大学の指導者の中にも同様の感想をもたせておられた人のあつた事をつけ加えておく。

また、ペンシルバニア大学では学生は University Council のメンバーになっている。すなわち教授六十四人、事務系職員二十一人、院生十四人、学部生十六人計百十五人からなるこの委員会は学長にアドバイスする機能を持っている。コロンビア大学においても同様でありユニバーシティ・セネトのメンバーとして意見をのべる。M・I・T. においても理事の若干のメンバーと教授と学生とで委員会をつくっている。また教授会に、学生はオブザーバーとして出席が許され、直接に、学生に関係あることがらにのみ、前もって申し出ておけば発言することができる。しかしミネソタ大学のユニバーシティ・セネトの時に述べたように、他の大学におけると同様、人事、財務問題については一切討議の対象にはならぬ。(Mr. Malcolm G. Kispert, Vice President of Academic Administration の談) ホuston 大学の教授会には、場合により二、三人が招かれることがあるのみで意志疎通のための委員会は現在なく、学生部長がその任にあたる。現在、University Congress の試案を提出中であるとのことであり、この試案によれば教授三十

人、事務系職員三十人、学生三十人計九十人からなる委員会を構成し毎月一回定期的に会議を開く方針である。

以上述べてきた大学においては、学生代表はすべて学友会が選出した代表である。またミネソタ大学、ペンシルバニア大学では日刊新聞を発行して、学生の意見を毎日公表している点は、日本といささか異なっている。

次に学生法廷についてであるが、ペンシルバニア大学の場合は二院制を採用している。

第一院は院生十二人、学部生十二人計二十四人からなり、第二院は教授六人、学生六人計十二人からなり、第一院の決定が行き過ぎている時、第二院で是正する機能を持っている。M・I・T. では学生のみ委員によって学生法廷が構成される。ただし、麻葉などのむずかしい問題については教授が決定権を持つている。ホuston 大学では教授三人、事務系職員三人、院生三人、学部生二人計十一人で構成されている。ミネソタ大学の場合にはいろいろの翻訳書が出版されているので、ここでは省略する。

以上のようにその組織はさまざまであるが、多くの大学で法廷が構成されている。日

本には御存知のように学生法廷というものはなく、東大の大学改革案の中に示されているのみである。興味のある問題といえる。

米国の学生デモは非常に激しいといわれるが、私が大学訪問中、一度もデモに会ったことはなかった。大  
学関係者のはなしによると、学業がきびしく、成績がある程度以下になると退学させられる規定があり、そのため日本のように一年中その運動に没頭することは不可能であるとの

ペンシルバニア大学

学 生	Undergraduate schools	Parttime students	Graduate and Professional Schools	Total
	7,416	2,930	8,118	18,464

教職員

(1) Full time Administrative and Professional Staffs	625			
Part time		"	133	758
(2) Academic Personal				4,628
(3) Salaried Employees		Full time	2,856	
		Part time	120	2,976
(4) Wage Employees		Regular	1,296	
		Temporary Weekly	91	
		Extra Service	2,883	4,270
(5) Hospital of the University of Pennsylvania		Full time	776	
		Part time	165	941
(6) General Service		Full time	1,471	
		Part time	232	1,703
		Total		15,276

カリフォルニア大学バークレー

学 生	28,000
教 員	1,100
研究員	3,000
職 員	4,500
計	8,600
ミネソタ大学	
学 生	50,000

教職員 (Part timeを含む)	12,000
Part timeの学生アルバイト	5,000
計	17,000
ミシガン大学	
学 生	32,000

教員系 (Part timeを含む)	4,000
研究員系	3,100
管理業務および専門職職員	2,100
サーベンス系職員	2,700
技術職員	900
病院関係	4,000
計	16,800

ハーバード大学

学生	9,000
教員	1,000
職員	3,000
計	4,000

M. I. T.

学生	7,400
教員	900
研究員	2,000
授業補助者	600
研究補助者	800
秘書	800
その他	2,800
計	7,000

ノーーストーン大学

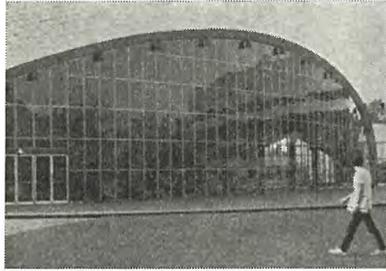
学生	13,000
教員 (Full time)	700
教員 (Part time)	2,000
職員	1,300
計	4,000

ことであつた。この点も日本と米国のとの大学における重要な相違点の一つであらうと思ふ。

(五) その他

A、教職員数と学生数

米国の大学は電子計算機によって事務能力の向上を図り、授業補助者を使って多人数教育の弊害をカバーし、研究員、研究補助者を使って研究を追求しているのであるが、一体、学生数、教員数、職員数はそれぞれ、どのような数字であらうか。次に概略の数字を示すが、各大学によって数字の基礎が若干異なる



M. I. T. 校舎の一部

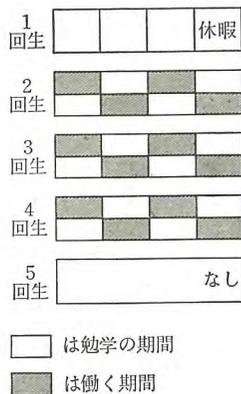
ので、正確な比較はむずかしいことをご了承願ひたい。以上を示した数字によって概略の

傾向を推察することができる。すなわち、学生数と教職員数との比率は日本の私立大学と比較する時、極めて高く、そのため米国では学生に行き届いた指導とサービスをしているといひ得る。また、パートタイムの職員とアルバイト学生を多く使っている点も労働力不足に悩む日本においても考慮すべき点であらう。

B、特殊な大学

—North Eastern University

この大学は勤労青年が働きながら学ぶことのできるシステムになつてゐる。一年間を四つのクォーターにわけ、二回生、三回生、四回生の総学生のうち、五十%の学生は一のクォーターに働き、二のクォーターに勉学し、三のクォーターにまた働き、最後の四のクォーターに再び勉学をする。つまり四クォーターを交互に勉強し、働くのである。残りの五十%の学生はその反対の行動をする。ただし一回生と五回生は勉学のみであり、働くクォーターはない。今これを図解すると、



ということになる。学校は会社とタイアップし、学生は在学中に自分の仕事についての適性を発見し、よければその仕事を卒業後も続けることになる。今のところ卒業後も続けているものは二分の一か三分の一である。また勤労学生の収入は週平均百十ドルであり、二十六週間で二千八百六十ドルに達し、それによってポストン在住者は自給自足の生活ができる。学校側よりみても設備は総学生数の半分程度でよく、学費は全学生より支払われ(一人千六百ドル)、決して悪い条件とはならない。ただ教員の勤務時間については、彼らの四十％は三十九週間、六十％は四十五週間の契約であって、米国における一般通常の大学と比較してみた場合、勤務時間が、やや長

いようである。

このようなシステムは工学部、商学部のように企業に直接役立つものが一番適しているといわれ、全米で約二百校がこのシステムを採用している。ただし全学部にわたって適用している大学は数える程しかないといわれる。このように働きながら学ぶ大学は勤労学生にとって好都合なことはいうまでもなく、学校側にとっても決して悪い条件ではない。こうしたシステムは、将来の日本においても



ミシガン大学の駐車用ビルディング

参考になるのではなからうか。

### C、キャンパス

米国では、近年設立されてきたマンモス州立大学は多数の学生を収容するため、その設置場所を街から遠く離れた郊外に求めている。したがってそのキャンパスは実に広大であり、私が訪問したミシガン大学、ミネソタ大学、カリフォルニア大学デヴィスなどは環境がよく、すばらしいものであった。ミシガン大学はキャンパス内に森あり、川あり、池あり、その中を大型バスが学生のために十分位の間隔をもって運行している。町の中に立つた大学にはみられない風景である。学生はそのキャンパス内で起居し、理想的な環境のもとで勉学にいそんでいるのである。一方、古くからある有名私立大学は、現在では街の中に位置しているものが多く、ハーバード、M・I・T、シカゴ、エール、ペンシルバニアなどの各大学は、したがって学生数も二万人をこえてはいない。そして多額の国庫補助金と寄付金にささえられている。しかしニューヨーク大学になると、経営上多数の学生を収容しており、総数四万四千(期首に

# 同志社と民芸運動 (四)

西 郵 辰 三 郎

十

同志社に学ぶことよって、私は恩師、柳宗悦先生とめぐりあい、先輩村岡景夫先生と親しくなり、ひいては河井寛次郎、浜田庄司両先生とも昵懇の間がらとなって、全国各地において、美しい民芸の仕事に携わる多くの名もなき職人達とも友人になることができたのは、何よりの喜びであり、また感謝すべきことであつた。キリスト教的にいえば、神の摂理であり、仏教的にいえば、不思議な因縁によるのであろう。なかならず柳先生を心から愛し、信頼し、民芸運動の将来を展望して止まぬ吉田璋也博士を知ることよって、私は博士の運動に異常な興味と関心を寄せはじ

めたのである。

そもそもどうすれば、柳先生によつて発見されたあの美しい数々の民芸品が保存されるか。現代においてもそれらの再生産は果たして可能なか。またどのような組織を作れば、今も昔のように無心のゆえに美しく、親切で健康な実用品が生産されるのか。またそれが社会に届けられて、一般大衆が美の恩恵に預かることができるのか。

これらはすべて民芸運動の将来に関する重要な設問である。とくに天国に国籍をもちたい念願をもっている同志社人や、民芸愛好者に対しては、あたかも広く深い拋物線のように身近かに投げかけられる重要問題である。それらは美に結合し、生活に参与し、政治や

経済に関係し、宗教、教育、芸術、哲学、美上の諸問題にもつながっている。それらは当然文化現象として、学問的にも異常な注意が集められるにちがいない。

美の王国建設についての理想樹立や、その実践についての学問的研究は、同志社のようにキリスト教をもつて建学の精神として、一大綜合学園が、相協力してその任務に当たるべきだ、というのが私の考えであり、また念願である。しかし残念ながらそうしたい願いは現在ではほとんど果たされていないように見えるが、どうであろうか。

ここで私はいよいよ吉田璋也博士の提唱による、来るべき民芸運動について語らねばならぬ時がきたのである。

吉田博士は耳鼻咽喉科の名医。早くから柳先生に師事され、とくに民芸の将来に対して、具体的な仕事を実行し、ついに鳥取や東京に「たくみ」工芸店を創設、さらに鳥取美術館を設立して今はその館長として、とくに次の世代の育成に尽力している、私の尊敬する先輩である。先生が「民芸運動についての私の信念」と題された次の短編は、民芸運動の由来からその将来までを簡明瞭に記述し、ま

た前述した諸設問の解明にも役立つことと思  
うのでここに転載させてもらふこととする。

○ 民芸運動は、美に依る社会改革運動の一つであ  
る。その美は人類の生長に人類の幸福に役立つ美  
しさであると言うまでもない。健康な美、正しき  
美、それである。

○ 斯様な美しさの宿る衣食住は、吾々人間に、自  
ら健全な生活へと働きかける。人間は環境から影  
響を受けずにはいないからである。私は、建築も、  
料理も、衣服も広い意味で工芸の世界だと思つて  
いる。民芸運動は健康美に満ちた工芸に依つて、  
吾々の暮らしを建て直そうとする仕事である。民芸  
運動は一面に産業を興隆させもする。だが、それ  
は主ではなく従である。まして、懐古趣味や、民  
俗研究ではない。

○ 民芸運動の起源は、柳宗悦先生の「工芸の道」  
の著述から始まる。そして、先生は一時代前まで  
の民衆の用いる雑器には、健康美が宿ると指摘さ  
れ、貴族工芸と民衆の工芸とを對比させ、何故に  
民衆的工芸（民芸）に健康美が現れたかを説かれ  
た。また工芸に自力道と他力道とあり、無心の作  
の如何に美しきかを例証された。そして、古民芸  
の展観に依つて、一般に実物教示をせられた。そ  
の後、この民芸の説に賛意を持ち、これらの雑器に  
宿る健康美の真理を体得して再現させようと努め

る作家が出て来た。次で日本民芸協会が設立さ  
れ、雑誌「工芸」が発刊されて、運動の形式をと  
つて来た。やがて、日本全土を行脚し、今も残り  
現在も遺る民芸品の探索が始まり、世に紹介され  
た。また、或る地方では新しく民芸品を作る試み  
も始められた。そして残存民芸品と新作民芸品を  
各家庭に配給する店「たくみ工芸店」が生まれ、  
民芸品の実用の時代まで来た。また、この運動の  
当初よりの計画だった日本民芸館も、東京駒場に  
建設され、如何なる美が、健康な美であり、更に  
美しさであるかを一般に展示されている。更に  
月刊「民芸」も誕生して、この仕事の一般普及化  
を計画し、大衆に呼びかけようとしている。

○ 何時のころにか、民芸作家なる言葉が出来てい  
た。民芸品を作る人の意ではない。職人のことで  
はない。自力道の行をする個人作家で、民芸に宿  
るが如き健康美を、その作品に表現しようと努め  
る人の意である。これらの人達は、古民芸を究明  
し、その生れる環境も考察し、現在も残る民芸  
からはその技法を追求して、新しく創案工夫を凝  
らし、独自の作品を製作している。だが、これ等  
の作家は、他に大きな使命を持っている。自分だ  
けが、精進の道を歩み、少数の品物を世に送るだ  
けでは、在来の作家と大差はない。民芸作家の存  
在の意義は、馬鹿でない限り、どんな人間でも、  
また、現代の如き生活環境にあつても、健康美の  
宿る品物が、自ら、生産される自然の約束を発見

して、新しい民芸品を生産する職人を指導し、い  
い物を大量的にもと、努める人達でなければなら  
ぬ。民芸運動は少数の人間が相手ではない。広く  
民衆が救われなければならない。

○ 現在、吾々のこの運動に関与する民芸作家は、  
未だ数も部門も余りにも少ない。僅かの陶磁と染  
織と版画の人達に過ぎない。これから工芸の各部  
門に優れた民芸作家が出現しなければ嘘である。  
木工、漆工、金工、石工、また硝子、七宝、革紙  
工にも、さては建築家にも料理人にも裁断家にも  
と、あらゆる部門にその人が欲しい。

○ 然し民芸新作を育てるには、単にこれ等の民芸  
作家に待つばかりでは困難である。この問題はこ  
の運動で最も肝心であり、最も難題である。また  
度々論議を重ねた問題でもある。然し更に常に新  
しく考究を続けたいと思う。

○ 民芸運動の将来は「たくみ」がその活躍の中心  
となるであろう。品物が集り、捌けて動いて行か  
ねば民芸は育たないからである。残存民芸が漸次  
その姿を消そうとするのは需要のないことがその  
主なる原因である。そのためには「たくみ」はよ  
き問屋となつて、彼等の生活を保証してやらねば  
ならぬ。また新作民芸に就いては作家と職人との  
間にあつて、溶媒となるよき問屋でなくてはなら  
ぬ。使い手のためには最もよき商店であり、生活用  
品の総てを用意し民芸百貨店とならねばならぬ。



んは、やはり偉い人だと思ふ。あるいは氏が、あのころ（海老名総長時代）受けた同志社の理想主義教育の影響によるのではあるまいか。住谷総長をはじめ、多くの同志社人が敬愛している故ラーネッド博士の「右手に聖書、左手に経済学」という思想的立場を受け継いでおられたのかも知れぬ。

おもえば「たくみ」の仕事には、同志社の建学の精神に共通する良心的エトスが、物心に流れているような気がした。

これらは、「たくみ」見学を主とした当時のわたくしの山陰旅行から受けた大きな収穫であった。

## 十二

私が日本民芸協会の仕事の中でも、とくに興味と関心を深めたのは、自分の生い立ちや環境からも、吉田先生の「たくみ」の仕事であり、京都の新作民芸に関する運動であった。しかし実のところ、いかに私が美しいもの、その社会化という高い理想に燃えたとしても、冷厳な現実を考えると、いささかたじろがざるを得なかった。このすさまじい商業主義的機械時代に、果して柳先生の氣に入るよ

うな民衆的工芸品の生産が可能であるのか。また利潤を二の次にするような維持経営が可能なのか。心中このような矛盾対立や狐疑逡巡もないではなかったが、何といつても柳先生によって教示された民芸品の美しさに魅了された私には、おのずから熱い情熱が湧きあがり、いよいよ勇を鼓してその道にとび込まざるを得なかった。この決意が固まったある日私はその旨を親しい村岡さんに話すと、その話はずぐ東京の柳先生や五条坂の河井先生にも伝わり、結果はみな大賛成ということになった。

こういう次第で、私は正式に日本民芸協会への仲間入りをしたのである。やがて河井先生のお口添えで、その一部を改造した私の家には、全国各地の民芸品が、東京や鳥取の「たくみ」をとおして、次々に届けられることになった。

それらの荷物が、家に到着すると、私はそれこそ宝の山に入る思いで荒縄を切り、こもを解き、一つ一つの品の美しさに驚きながら、やや興奮した面持ちで、それらを陳列棚に列べてみるのが楽しみであった。それらは、百年以上も前に建てられた古風な家のムードに

も大体調和して、自然にかもし出された民芸の美しさに、われながら酔ったようなこともしばしばあった。

私は同志社の一校友として、美の国に参与し得るこの「たくみ」のような仕事に携わること、いい知れぬ喜びと自負を感じていた。これらの思いは、不思議な電波のように、東京の柳先生や益子の浜田先生にも伝わったのであろうか。その後間もなく、柳・河井・浜田の三先生と国府台病院長、式場隆三郎博士の、響きこを並べての訪問に接したのである。肝心の吉田璋也博士は、そのころすでに北支方面に活躍中で、その時分はまだ同志社大学に教鞭をとっていた吉田先生の盟友村岡先生が、不馴れな私のために接待役や介添役をしてくださったので大いに助かった。渋いホームパンの洋服がいかによく似合われた柳先生の温顔も、河井先生のわきあがるように情熱的なお話ぶりも、浜田先生の泰然として健康そうなお姿も、式場先生のいわゆるロマンスグレイの長髪やたばこの紫煙も、いまなおそのまま私の心の中に生きていて、なつかしい思い出となっている。時は昭和十四年の秋で、このように「たくみ」のチェーンのよ



京都民芸協会(前身)の集り(昭15, 五条坂、河井寛次郎邸にて)  
 向って右 田、荒、尾、黒、岡、村、柳、松、原、西、野、小、松、原、玉、上、森  
 (前列) (後列)

うな仕事をわが家で始めたのは、京都では最初のことであった。「たくみ」以外には全国にそのような店はまだ一軒もなく、先生方にはそれだけにたいへん喜んで下さった。その時初めてお目にかかった式場博士は、精神科の医者のほか、幅広い活動家で、ペンクラブの会長であり、「月刊民芸」を編集しておられた。著作家としても名をなし、見聞したことには、すぐ文章になるような能筆家であったので、わが家の訪問記も「民芸と生活」と題されたきわめて美しい本の一部に載っている。芹沢銈介氏の装幀で、カットや挿画もすばらしいものである。

その後二、三回、本町の家や河原町で全国民芸品特別展覧即売会を催したこともある。当時大毎京都支局長で民芸運動の有力な後援者でもあった岩井武俊氏の好意により、これらの催しは、大毎京都版の上段記事にもなったので、ただちに拡がり、来客数は多く、またその客筋もよかった。客筋がよいというのは、単なる金持を意味していないことはいうまでもない。ものわかりのよい人々という意味であるが、その反面、買いたいものも少ないで、ものを見るよりは美学などの理屈をこねまわす、いわゆるインテリには閉口したが、いい修養になったと思っている。同志社関係では、理事の武間富貴夫人や、夫人の母堂大沢芳恵さん、文学部美学専攻の園類三教授や、本部の田中良一氏、宣教師のミス・クラップ、ミス・グインの顔も見え、毎回お祭りのような賑やかさであった。今は人間国宝に指定された畏友、黒田辰秋兄や、民芸品や料理によって美の国の仕事を続けている西垣光温氏等が、目利きらしい買いたいものをされたのを覚えている。

### 十三

その後私はいよいよ「東京たくみ」に多少の出資をして、株主となり、関西の探題役のような仕事をするようになった。

相前後して、村岡先生は、同志社大学を辞任し、柳先生の跡を追って東京に移転された。そうして学究生活とともに、日本民芸協会の組織づくりや「たくみ」の監査役となり、全国的な民芸活動にはいられた。大毎の岩井支局長は、発展途上の日本民芸協会のため、また村岡先生への餞別の意味もあったのか、とにかく民芸運動促進のため、とくに京都在住の実業家に対し、募金運動を開始した。私の記憶に間違いがないとすれば、応募者の中には、鳩居堂の熊谷直之、織物の川島甚兵衛、酒造の大倉治一、罐詰めの浜口富三郎、島津の鈴木庸輔、製氷の山田啓之助、歯科器具の松風憲二氏らの有力者が肩を並べていた。私が世話役で、家には今でも岩井さんの募金に関する立派な手紙が残っている。それはなかなかの達筆で、今ではあれほど書ける人はいないであろう。余談になるが、岩井さんの令息達は同志社大学を卒業し、東洋レ

ジョンや大毎に勤務しているが、長男強國氏の令息がいま香里で学んでいる姿をみると、どこことなくあの猛々しいお祖父さんに似ていて、頼もしい気持がする。岩井さんは顔のきわめて広い人でもあったので、民芸運動拡充のためには、大きなプラスになった。

村岡先生が東京へ去った京都は、一抹の寂寥を感じさせたが、それでも京都には柳先生や村岡先生によってのこされた仕事があるのであるから、責任は大きく、いたずらに淋しがるまいと、私は毎日のように河井邸を訪問した。そのうち木工の黒田辰秋兄や、河井先生真弟子の甥御、武一さん、洛北木野黨の上田恒次兄、五条坂藤平黨の森川唯一兄、芳野町の荒尾常蔵、児玉正太郎の諸兄等とはとくに親しい間柄となった。われわれ相互の友情は、心とものとからきていて、美しいものを見るとみな一致してしまった。河井寛次郎先生を師匠としていることは、なんともしあわせなこと、無理をしての仲間意識ではなく、自然に培われてゆく愛情であった。柳先生のいわゆるまさにかくあるべき協団は、傑出した師匠と、従順なる工匠との愛の連合体である、とするのなら、当時の五条坂協団は、

その理想に近いものといえるかも知れない。この協団から誕生するものこそ、柳先生の希求される「協団的芸術 Communal Art」として、これからの社会を温め、これに奉仕するものとなるであらう。

(昭七・大、法卒、同志社香里中高教諭)

(六十頁より)

は六万」といわれ、また、町の中に位置しているためビルは高層建築になっている。

このような現実をみると、増大する学生の大部分を引きうけている日本の私立大学はその環境を米国の州立大学がもつようなキャンパスに求めることが最も望ましいといわねばならない。そのためには米国のように交通が便利であることが条件になってくる。この条件整備の見通しを持ってマンモス私立大学はそのキャンパスを町から離れた郊外に移すことを考えるべき時期にきていると思うのである。

以上は私が短期間に調査した事柄の概略で

ある。今後、閉ざされた大学から開かれた大学へ、孤高の大学から社会の有機的な一員としての大学へと変貌を余儀なくされることはもはや社会的必然ともいえるようになってきている。現在、米国の大学が進みつつある外的条件整備の方向は、確かに一つの有力な参考資料となるものと考えられる。そして日本の新しい大学の態勢をどのようにもって行くかによって今後百年の日本の運命が決せられることを考える時、ますます学び、考えそして実行せねばならないことを痛感するのである。

最後に、私が米国でお会いした三十六名の大学関係者がすべて非常に立派な人々であり、また極めて親切であり、懇切丁寧に種々ご説明を賜わったことに深く感謝をささげるのである。  
(工学部事務長)

## ペルシヤの詩人たち

駒井義明



今日（一九六九年八月一日）は、永年懼れたペルセポリス見学の日である。早朝起床、六時頃ホテルを一行とともにバスで出発、二十分余りでテヘラン空港に到着、七時に日航のジェット機に代ってイラン航空の四発機でイランの古都シラーズへ向う。羽田を出てから昼間外国の空をゆつくりと眺めるのは初めてなので、皆貧るように窓外の景色に見入っている。八時頃イスファハンの上空にさしかかったが、眼下に見えるイラン高原の山々を眺めて、その昔安息に使した中国の甘英のころなどを憶い起した。九時頃シラーズ空港に到着、外は乾燥地帯特有のカンカン照りの晴天である。直ちに、ペルセポリス行きのバスに乗ったが、室内の温度は四十度。しかし乾燥

しているせいか、日本で想像したほど暑くはない。九時十五分シラーズ出発、シラーズは「バラの町」という異名のあるとおり、ペルセポリスへ向うチャンドール通りなどは色とりどりのバラの花で一杯である。ペルセポリスまで六十キロの道程を一時間二十分かかって十時半頃ペルセポリスの遺跡に到着した。ペルセポリス（イラン名はダハテ・ジャム・シート）は周囲は岩山で荒寥としており、教科書の写真などで見たとおりであるが、観覧料徴収所兼売店のような建物の外、数軒の商店のようなものがあるだけである。遺跡では一時間半ほど見学に費したが、修理中の箇所も数ヶ所見うけられた。辺りに人家は無いようであったが、どこからともなく子供の群れ

があらわれて、われわれにつきまといてきたが、これはどこでも見る風景である。

ペルセポリスの見学を終り、十二時過ぎここを出発し、ふたたび岩山の道をしばらく走ると、これも写真で熟知した大岩壁に窟状につくられたダリウス大王他アケメネス朝の二王の廟所が望見された。そして大岩壁の下方には、これまた有名なササン朝の皇帝に降伏を乞うローマ皇帝の彫像が見られた。

この辺りは草木の無い岩山ばかりなので、その上飲料は乏しく、灼熱の太陽に照り付けられて一行はいささかグロッキーになってシラーズの町のパーク・サアデイ・ホテルへ帰着したのは二時をすこしまわった頃であった。さて、ホテルの名前のサアデイと、ホテルの前の通りの名、ハーフィズ通りとは、ともにシラーズにゆかりの深いペルシアの二大詩人の名である。

われわれは、明日この二大詩人の墓を弔う予定である。そこで、この二人の詩人について少し語ろうと思う。

先ずサアデイについていうと、彼は西紀一一八四―一二九一の人で、当時ペルシアでは、ササン朝を滅ぼしたアッバース朝がバグダッ

ドに都したが、北方から起つたセルジューク・トルコに圧迫されて、その国力は弱まり、遂に一二五八年モンゴル軍（フラーグに率いられた）のため、カリフのムスタシム・ピラーは捕えられ、このカリフ王朝は滅亡した。かくして、ペルシアにはイル汗国が君臨した。サアデイはこのような統治者の更代という困難の時代に出あつた人である。

彼の本名はムシャリッフ・ウッディンで、詩人であり、散文作家を兼ね、ペルシア文学の古典といわれる「ブスタン」（果樹園）と「グリスタン」（バラ園）の二大作の著者である。彼は父親のムスリー・ウッディンを幼年時代に失ない、後に勉学のためバグダッドにある有名なニザミヤ大学に送られたが、そこで彼は伝統的なイスラムの勉強をした。

さてモンゴル軍のペルシア侵入によつて、ペルシア社会には落ち着かない状態が続いたが、その状態は、サアデイの言葉を借りると、全世界は、ニグロの縮毛に以て、いるといわれたが、この混乱したペルシアの状態はこの詩人を多くの国々へ、放浪の旅に出させた。そして、彼は北アフリカ・中央アジア・インドなどで彼の数多くの冒険に出会つてゐる。

またシリアで、彼は十字軍に従軍していたフランク人に捕えられ、トリポリ要塞の溝掘りに働かされた。或いは彼は生涯に十五回もメッカに巡礼したといわれる。そして、彼が故郷のシラーズに再び現われた時は、既に老人であつた。（或いは中年であつたともいわれる。）彼は作品のブスタンを二五七七年に、そしてグリスタンを二五八八年に、この地方の支配者であるアブー・バクル・イブン・サアドに捧げた。彼のペン・ネームのサアデイはこの支配者の名からきてゐるといわれる。

このようにして、サアデイは彼の余生をファルス地方の中心であるシラーズで送つたが、それはタブリーズに打ち立てられたモンゴル帝国のイル汗達（波斯の名のこつた）地方へ送つた異教徒ならばに回教徒の以後の支配者や総督達に彼の作つた詩を捧げしめたからである。なおサアデイの作品の中で当時の出来事に関係した事柄は、一二七〇年頃で終つてゐる。これは彼の活動の最後の年代を示すものといえよう。

さて、サアデイが、彼の二大作品を、その晩年に、しかも続けさまに作りだしたことについては色々疑問をもつ人もいるが、これ

は驚くには当らない。それは彼の作品が公表された機会のずつと前に、作品の材料は集められていたにちがいないし、又彼の詩も書かれていたにちがいないからである。

ブスタンの方は叙情詩に用いられた韻律によつて全く詩句の体をなしており、また、回教徒に推奨された標準的道德、つまり正義・公平・適度・満足などを適切に説明した物語、ならびに、托鉢僧や彼らの夢中の行事の態度における反省から成つてくる。

グリスタンの方は主に散文で、色々な物語や個人的な回想を含んでいる。そして、その材料は、警句や忠告やユーモラスな反省を含んだチャーミングな小詩の変化で飾られてゐる。そして、グリスタンの中で説かれた諸道徳は、便法でいくつかに区切られてゐる。例えば、有益な嘘は、にぶい真実にまして選ばれるべきことが許されることなどである。

次にペルシア史家として有名なパーシィ・サイクスのペルシア史の中に引用されたサアデイの傑作グリスタンの中の代表作を左に掲げよう。それは左のようなものである。

\*

人生は七月の大陽の下の雪のようなもの

だ。彼自身自慢し、それを吹聴するものはないと思ふが、一つでもあるだろうか。お前は市場を探し求めたが、手はからだ。私はお前がお前のターバンを手離すのが心配だ。

まだ緑色をしているのに、自分の穀物を食べる人は、本当の収穫の時は落穂を拾うだけだ。サアデイの忠告には、お前の魂に心をとめるようにしなさい。

これが男らしいやり方であるが、それを進めなさい。

\*

次に、他のもう一人の大詩人はハーフィズである。本当の名はシャムス・ワッディン・モハメッドで、西紀一三二五年に生まれ、一三九〇年前後に没している。ペルシアの最も有名な叙情詩人で、シラーズに生れたが、そこで全生涯をすごした。宮廷詩人として、彼はシラーズの若干の支配者及び他のすぐれた人々の恩顧を受けたが、それらの人々の全てを彼の詩の中でうたっている。

ハーフィズは困難な時代を生きぬいた人である。君主達は追われ、シラーズは一度ならず外国の軍隊に占領された。また、彼の生涯

の末年にわたって、世界征服者チムールの矜しの影が気味悪く迫ってきた。

このような出来事多くの反響が彼の詩に現われている。しかし、その詩はそれ以上にシラーズのクラブ生活、彼の貴族のパトロンのわるふざけ、そして彼のイスラム教の正統派或いは分派の同時代の人々との論争について語っている。ハーフィズ自身の生活における指導的影響については、スーフィー教（回教の汎神論）であったといえる。スーフィー教はその信者に、根本的実在との結合の追求および伝統的な宗教並びに道德の束縛の拒絶に、完全な自己廃棄を要求した神秘的な運動であった。

ハーフィズの詩の表現の主な手段は、そして前にも後にも決してえられなかった一つの完成にもたらした手段は、ガザールという叙情詩の形式であった——これは六から十五の対句の叙情詩で、思想の論理的連鎖によるよりも、むしろ、思想と象徴性の統合によって結ばれていた。伝統的に、ガザールは、恋愛と酒を与えられ、恍惚と抑制からの自由に結ばれた主題は、自然に彼ら自身をスーフィー思想の表現に力を添えしめた。ハーフィズの功

績は、此らの約束ごとに新鮮さと鋭敏さを与えたことであった。それは全く彼の詩を退屈な形式主義から救っている。洗練されたペルシアの読者に対して、イメージを甚だ強くし、たかくされた連想を彼が見落したとしても、西方の読者はこれを理解することができるであろう。

全てのペルシャ語を話す地方におけるハーフィズの非常な人気は、しかし乍ら、技巧的な芸術上の妙技から離れた彼の単純なそして屢俗語的な言語の使用に、むしろ求めらるべきである。また彼の他から影響をうけない家庭的イメージの使用、或いは諷的表現の使用に求めらるべきである。特に、彼の詩は、人間性を愛することにより、平凡な人間の問題に対する同情、偽善に対する軽蔑、平凡さ、毎日の経験を一般化する能力などにより特色づけられ、そして神の実存の神秘的な絶えざる探求に詩を結びつけることにある。ハーフィズの詩がペルシアの村人たちによってさえ歌われたのは、此らの性質によるものである。西方における彼の広い訴えは、ドイツ語や英語などの彼の作品の若干の完全な翻訳からはなれて、多くの翻訳家が彼の詩の選集の翻訳

を發行した事實によつて示されている。

前にも引いたサイクスのペルシャ史によると、ハーフィズは青年時代は快楽や贅沢や飲酒に耽つたが、老年にはそれに飽きて宗教的になりスーフー教に所属した。ハーフィズはサアディと異なり、ペルシャ人特有の海への恐怖をもつており、彼は決して旅行家ではなかつた。マームード・シャー・バアマニの宮廷への切なる招待によつて、インドを訪ねるよう誘われて、彼はオルムズ（東西交渉史で有名な）の港へ旅し、国王のある船に乗船した。しかし、彼は船酔いが激しく、オルムズの港へ戻ることが許されることを主張し、それが許されて全てが駄目になつた。陸地へ帰りつくと、彼はチャーミングな頌詩を書いたが、それは次のようなものである。

寶石のまぶしきは私の視力を混乱させた。  
そのような海鳴りを私はかつて聞いたこと  
がない。

しかし、今や私は正しく感ずることができ  
るから私は自由にどうして語つたかを認め  
る。

さて、あの征服者として高名なティムール

がハーフィズの評判を聞いて、これを呼び出したのは有名な話であるが、ここですこしティムール（タメルラン）にふれてみたい。ティムールはチャガタイ汗国と縁が深く、且つその家は大臣の役を代々勤めており、彼の父アミール・トルガイは、トルコの貴族種であるバルラス氏のグルカン派の酋長であつた。

ティムールは青年時代に放浪生活を続けたが、南アフガニスタンの戦争で腕と脚に矢傷をうけ、その結果不具のティムールつまりティムール・ラングという仇名をとり、それがヨーロッパ風になまつてタメルランとなつたという。

さて、ティムールは諸地方を攻略したが、ムザファル王朝のシャー（王）のシュージャの息子で、今やファルス（波斯）王となつたザイン・ウル・アビディンが彼の命にしたがわないので、ティムールはその支配下にあつたイスファハンを攻めおとし、その上反乱を起して三千人のタタール人（モンゴル）を殺した復讐として、七万人を斬首してそれでピラミッドをきずいたという。

このようにして、ティムールの軍隊はイス

ファハンを落し入れた余勢をかつて、シラーズに攻め寄せたので、シラーズは城門を開いてティムールに降つた。そこでティムールは使を送つてハーフィズを呼び、両者の会見となつた。

この会見後二・三年でハーフィズは死んだが、彼は彼が一生熱愛したシラーズの郊外の花園に葬むられた。

ハーフィズの主な作品は「ディワン」つまり、頌詩集である。サイクスのペルシャ史に見えるその一例を左に掲げよう。

此らへ、此らへ、酌取りさん、順番にカップをまわして下さい。

恋愛については、はじめはたやすいようだが、やがて困難がくる。

そよ風が、さげ髪から開く、ぢゃ香のかおりを、

ぢゃ香のかおりのする小さい環の巻毛から、どのような血がわれわれの心臓に流れたるう。

若しもターバンを巻いた老人がお前に命令するならば、お前の祈りの敷物を葡萄酒で染めなさい。

何故なら、旅人は宿屋の作法やしきたりは

分らないから。……………

\*

八月二日、今日も相不変の晴天である。特別班はバサルガダイのキロス大王の墓に詣でるため、四時にホテルを出発したが、われわれ残留班はシラーズの市内を見学し、正午にシラーズ空港で特別班と出会う予定である。

そこで、先ず見学の手はじめとして、ハーフィズとサアダイの二大詩人の墓に詣でることになったが、ホテルからはいくらの距離もない。サアダイの墓は、まわりは花園で囲まれ、中央に六角形の屋根を頂き、大理石の柱をもったあづまや形式の建物があつて、その中央にこれも大理石の長方形の棺がおかれている。墓の区域は他から区切られ、入口はあるが、出入は自由でわれわれが訪ずれたときは何人かのペルシアの人々が建物の陰に憩んでいた。墓の区域のまわりには日本の松と同じものが植えられ、(松のペルシア名はカージェ)また花園にはつめきり草(ペルシア名オノレーズ)その他朝顔或はほうせん花など日本でも見かけるものが多い。

テヘランのホテルの庭にも日本と全く同じの朝顔が咲いていて、旅情をそそったが、中近

東では日本と共通の花が多い。さるすべり、夾竹桃、或はグラジオオラスなどがそれであるが、トルコのイースタンブルの花屋の店頭では沢山のグラジオオラスを見かけた。また、カイロの街路樹に赤く咲きみだれた夾竹桃が植えられていたのは非常に印象的であつた。

恐らくこれらの異国的の花は西方から日本へ渡つてきたのであろう。

われわれが次に詣でたハーフィズの墓は廟のような建物の中にあつて、外からは見られない。しかし、廟のまわりを花園で囲んでるのはサアダイの墓と同様である。その棺(大理石)のある所は奥まつた竈のような小室で、近くに清冽な水を湛えた井戸のようなものがあり、井戸をのぞくとその水は流れていて、魚がおよく姿が見られた。

シラーズの町は全体的に見て日本の奈良の都のような古都の感じで、非常にしずかでバラが多くバラの町といわれるのにふさわしい清らかな町であるが、二大詩人の墓はその静かな町の中の更に静らかな花園の中に眠っており、まことに詩人の永遠の場所にふさわしく感ぜられた。

サアダイとハーフィズの二大詩人の墓に詣でて、私はふとドイツの二大詩人ゲーテとシラーを憶い浮かべたが、何か共通点があるように思われた。

(元・同志社高校教諭、現在・京都外大勤務)

## アメリカ通信

高田智之

この通信は、サンケイ、スカラシップで、アメリカ、カラマズー大学に留学中の高田智之君から任谷総長のもとに届いた第一信である。(編集部)

☆

高田智之君は同志社大学の三年生ですが、去年サンケイ新聞社のスカラシップ外国留学生試験で、全国の多くの競争者を破つて第一位でパスし、在学中ですが、去年の九月アメリカのミシガン州カラマズー大学に留学し目下猛烈に勉強しております。高田君のアメリカ

か通信は、きつと同期生や後輩をも奮起せしめることと思っております。(総長住谷悦治)

☆

ずいぶん、ごぶさたいたしました。申しわけありません。御心配をおかけしたこともおもいます。お許し下さい。

こちらにきて、もう三カ月近くになろうと  
しています。先生の方もお元気でお暮しの  
こととおもいます。僕の方は9・9から9・23ま  
での家庭生活を楽しんだ後、大学の寮に入り  
9・28に授業が始まりました。予想していた通  
りきびしいです。受験時代を思い出します。

毎週かなりの読書量を要求され、一日おきに  
クイズと呼ばれる小テストがあります。三週  
間前に中間試験が終り、昨日「Capitalism  
and Freedom」 by Milton Friedman に関  
する十ページの小論文を仕上げ提出しまし  
た。これは経済のクラスのタームペーパーで、  
各自が選んでやるものです。約一カ月の期間  
が与えられたのですが、それでも、もっと時  
間がほしかったくらいです。提出日の前日ま  
ではたして間に合うかどうか心配でした。と  
にかく、感謝祭の前日である今日(11・25)ひ  
と息つくことができました。でも、ゆっくり

する間もなく、12・7から最終試験が三日間に  
わたってあります。こちらの学生でもきゅう  
きゅういっています。こちらの大学は、少な  
くともカラマズー・カレッジは、学生を遊ば  
せません……。最近つくづく外国語で勉強す  
ることは決してなまやさしいものではないこ  
とを痛感致します。授業中にうまくノートを  
取ってゆくことのむずかしさ。外国語で考え  
を深めることの苦しき。

こちらにきて二年目を迎えた優秀な日本人  
留学生(化学専攻)が僕にこんなことを、講  
義が始まってまもない頃、いいました。勉強  
する日本人留学生の間でこんな会話があるの  
だそうです。「クリスマスまでクルシミマス  
(苦しみます)」。最初の留学生にとってク  
リスマスまでがほんとに苦しく、勝負時なの  
だそうです。ここで、もうダメだといって投  
げてしまいう人がかなりいるそうです。今、彼  
のいったその言葉、なるほどと思います。

今のところ、だいたいこんなところです。  
自分のことばかり書いてしまってますみませ  
ん。いろいろ、こちらの印象など書けばいい  
のですが、なにしろ整理ができていません。  
お許し下さい。

先日十一月二十二日カラマズーに初雪が降  
りました。おおかたすねまでの高さに積もり  
ました。それまで、日本(京都)と気温など  
変らないかと思っていたのですが、急に寒くな  
りました。

十二月十日と一月三日までクリスマス休暇  
に入ります。この間どう過そうかと考えてい  
るところです。東海岸の方へ東部からきてい  
る友人をつたつて旅行しようかとも思ったり  
しています。

同志社大学の様子はいかがでしょうか。ま  
だ、これからお世話になった先生方や友人に  
手紙をかくところです。ずいぶん遅れてしま  
いました。そちらの方も朝夕の冷え込みがき  
ついでしょう?くれぐれもお体にはお気を  
付けて下さい。お元気で。

ミシガン州カラマズーより。 高田智之。  
またお手紙いたします。

今日十一月二十五日、こちらの夕刊とテレ  
ビのニュースで三島由紀夫氏が自害したこと  
を知りました。彼の「文化防衛論」などで最  
近の思想傾向を少しばかり知っていました  
が、まさかこんなことになろうとは思いませ  
んでした。あつげにとられている所です。